

湖中對酒作

湖中酒に對する作

夜坐不厭湖上月。晝行不厭湖上山。
眼前一尊又長滿。心中萬事如等閒。
主人有黍萬餘石。濁醪數斗應不惜。
即今相對不盡歡。別後相思復何益。
茱萸灣頭歸路賒。願君且宿黃公家。
風光若此人不醉。參差辜負東園花。

夜坐厭はず湖上の月。晝行厭はず湖上の山。
眼前一尊又長へに滿つ。心中萬事等閒の如
し。主人黍有り萬餘石。濁醪數斗應に惜まざ
るべし。即今相對して歡を盡さずんば、別後
相思ふとも復何の益あらん。茱萸灣頭歸路賒
なり。願くは君且つ宿せよ黃公が家。風光此
の若くなるに人酔はずんば、參差として東園
の花に辜負せん。

登鶴鵲樓

鶴鵲樓に登る

王之渙(井州人)

白日依山盡。黃河入海流。
欲窮千里目。更上一層樓。

白日山に依つて盡き、黃河海に入つて流る。
千里の目を窮めんと欲して、更に上る一層の
樓。

涼州詞

黃河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。
羌笛何用怨楊柳。春光不度玉門關。

黃河遠く上る白雲の間。一片の孤城萬仞の山。
羌笛何ぞ用ひん楊柳を怨むを。春光は度らず
玉門關。

山房春事

岑

參(嘉州刺史)

梁園日暮亂飛鴉。極目蕭條三兩家。
庭樹不知人去盡。春來還發舊時花。

梁園日暮亂飛の鴉。極目蕭條たり三兩家。
庭樹は知らず人去り盡くるを。春來還發く舊
時の花。

涼州詞 山房春事

逢入京使 積中作 酒泉太守席上醉後作

逢入京使 京に入る使に逢ふ

故園東望路漫漫。雙袖龍鍾淚不乾。
馬上相逢無紙筆。憑君傳語報平安。

故園東に望めば路漫漫。雙袖龍鍾として涙
乾かず。馬上に相逢うて紙筆無し。君に憑つ
て傳語して平安を報ぜしむ。

積中作

走馬西來欲到天。辭家見月兩回圓。
今夜不知何處宿。平沙萬里絕人烟。

馬を走らして西來天に到らんと欲す。家を辭
してより月の兩回圓なるを見る。今夜知ら
ず何れの處にか宿せん。平沙萬里人烟を絶つ。

酒泉太守席上醉後作

酒泉太守能劍舞。高堂置酒夜擊鼓。
胡笳一曲斷人腸。座客相看淚如雨。

酒泉の太守能く劍舞す。高堂酒を置きて夜鼓
を撃つ。胡笳一曲人腸を斷つ。座客相看
涙雨の如し。

胡笳歌送顏真卿使赴河隴

胡笳の歌顏真卿の使して河隴に赴くを送る

君不聞胡笳聲最悲。紫髯綠眼胡人吹。
吹之一曲猶未了。愁殺樓蘭征戍兒。
涼秋八月蕭關道。北風吹斷天山草。
崑崙山南月欲斜。胡人向月吹胡笳。
胡笳怨兮將送君。秦山遙望隴山雲。
邊城夜夜多愁夢。向月胡笳誰喜聞。

君聞かずや胡笳の聲最も悲きを。紫髯綠眼の
胡人吹く。之を吹く一曲猶ほ未だ了らず。愁
殺す樓蘭征戍の兒。涼秋八月蕭關の道。北風
吹き斷す天山の草。崑崙山南月斜ならんと欲
す。胡人月に向つて胡笳を吹く。胡笳の怨將
に君を送らんとす。秦山遙に望む隴山の雲。
邊城夜夜愁夢多し。月に向つて胡笳誰か聞く
を喜ばん。

胡笳歌送顏真卿使赴河隴

三日尋李九莊 三日李九の莊を尋ぬ

常

建

雨歇楊林東渡頭。永和三日盪輕舟。
故人家在桃花岸。直到門前溪水流。

塞下曲

玉帛朝回望帝鄉。烏孫歸去不稱王。
天涯靜處無征戰。兵氣銷爲日月光。

其二

北海陰風動地來。明君祠上望龍堆。
獨體盡是長城卒。日暮沙場飛作灰。

破山寺後禪院

清晨入古寺。初日照高林。
曲徑通幽處。禪房花木深。
山光悅鳥性。潭影空人心。
萬籟此俱寂。惟聞鐘磬音。

春曉

孟浩 然(襄陽)

歲暮歸南山 臨洞庭上張丞相

春眠不覺曉。處處聞啼鳥。
夜來風雨聲。花落知多少。

春眠曉を覺えず。處處啼鳥を聞く。
夜來風雨の聲。花落つること知んぬ多少。

歲暮歸南山

歲暮南山に歸る

北闕休上書。南山歸弊廬。
不才明主棄。多病故人疎。
白髮催年老。青陽逼歲除。
永懷愁不寐。松月夜窗虛。

北闕書を上るを休め、南山弊廬に歸る。
不才明主棄て、多病故人疎なり。
白髮年老を催し、青陽歲除に逼る。
永懷愁ひて寐ねられず。松月夜窗虚し。

臨洞庭上張丞相

洞庭に臨み張丞相に上る

八月湖水平。涵虛混太清。
氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城。
欲濟無舟楫。端居恥聖明。
坐觀垂釣者。徒有羨魚情。

八月湖水平なり。虚を涵して太清に混す。
氣は蒸す雲夢澤。波は撼かす岳陽城。
濟らんと欲するに舟楫無し。端居して聖明に恥づ。坐して釣を垂るる者を觀る。徒に魚を羨むの情有り。

罷相作

相を罷めて作る

李適之

避賢初罷相。樂聖且銜盃。
爲問門前客。今朝幾箇來。

賢を避けて初めて相を罷め、聖を樂んで且つ盃を銜む。爲に問へ門前の客、今朝幾箇か來る。

春行寄興

春行興を寄す

李

華(遐叔)

罷相作 春行寄興

黄鶴樓 失鶴

宜陽城下草萋萋。澗水東流復向西。
芳樹無人花自落。春山一路鳥空啼。

宜陽城下草萋萋。澗水東流復向西。
芳樹無人花自落。春山一路鳥空啼。

黄鶴樓

崔

顥

昔人已乘黃鶴去。此地空餘黃鶴樓。
黃鶴一去不復返。白雲千載空悠悠。
晴川歷歷漢陽樹。芳草萋萋鸚鵡洲。
日暮鄉關何處是。煙波江上使人愁。

昔人已乘黃鶴去。此地空餘黃鶴樓。
黃鶴樓。黃鶴一去不復返。白雲千載空悠悠。晴川歷歷漢陽樹。芳草萋萋鸚鵡洲。日暮鄉關何處是。煙波江上使人愁。

失鶴

鶴を失ふ

陸

龜

蒙(魯望)

養汝由來歲月深。籠開不見意沈沈。
想應只在秋江上。明月蘆花何處尋。

汝を養ふ由來年月深し。籠開けて見えず意沈沈。想ふ應に只秋江の上にいるべし。明月蘆花何れの處にか尋ねん。

離別

丈夫非無淚。不灑別離間。
仗劍對樽酒。恥爲遊子顏。
蝮蛇一螫手。壯士疾解腕。
所思在功名。離別何足歎。

丈夫涙無きに非ず。灑がず別離の間。
劍に仗りて樽酒に對し、遊子の顔を爲すを恥づ。蝮蛇一たび手を螫さば、壯士疾く腕を解く。思ふ所は功名に在り。離別は何ぞ歎ずるに足らん。

湘南即事

戴

叔

倫(幼公)

離別 湘南即事

江村即事 秋日

盧橋花開楓葉衰。出門何處望京師。
沉湘日夜東流去。不爲愁人住少時。

盧橋花開きて楓葉衰ふ。門を出でて何れの處にか京師を望まん。沉湘日夜東流し去る。愁人の爲に住まること少時もせず。

一八四

江村即事

司空曙(文明)

罷釣歸來不繫船。江村月落正堪眠。
縱然一夜風吹去。唯在蘆花淺水邊。

釣を罷めて歸來船を繫がず。江村月落ちて正に眠るに堪へたり。縱然一夜風吹き去るも、唯蘆花淺水の邊に在らん。

秋日

耿漳(洪源)

返照入閭巷。憂來誰共語。
古道少人行。秋風動禾黍。

返照閭巷に入る。憂來りて誰と共に語らん。古道人行少なり。秋風禾黍を動かす。

聞雁 雁を聞く

韋應物(蘇州刺史)

故園渺何處。歸思方悠哉。
淮南秋雨夜。高齋聞雁來。

故園渺として何れの處ぞ。歸思方に悠なる哉。淮南秋雨の夜、高齋雁の來るを聞く。

滁州西澗

獨憐幽草澗邊生。上有黃鸝深樹鳴。
春潮帶雨晚來急。野渡無人舟自橫。

獨り憐む幽草の澗邊に生ずるを。上に黃鸝の深樹に鳴く有り。春潮雨を帯びて晚來急なり。野渡人無く舟自ら横はる。

休日訪王侍御建不遇

休日に王侍御建を訪うて遇はず

聞雁 滁州西澗 休日訪王侍御建不遇

一八五

九日驅馳一日閑。尋君不遇又空還。
怪來詩思清人骨。門對寒流雪滿山。

九日驅馳して一日閑なり。君を尋ねて遇はず
又空しく還る。怪み來る詩思の人骨を清くす
るを。門は寒流に對し雪は山に滿つ。

幽居

貴賤雖異等。出門皆有營。
獨無外物牽。遂此幽居情。
微雨夜來過。不知春草生。
青山忽已曙。鳥雀繞舍鳴。
時與道人偶。或隨樵者行。
自當安蹇劣。誰謂薄世榮。

貴賤等を異にすと雖も、門を出づれば皆營有
り。獨り外物に牽かるる無く、此幽居の情を
遂ぐ。
微雨夜來過ぐ。知らず春草の生ずるを。
青山忽ち已に曙れば、鳥雀舍を繞つて鳴く。
時に道人と偶し、或は樵者に隨つて行く。
自ら當に蹇劣に安んずべし。誰か世榮を薄ん
ずと謂ふ。

柳巷

韓

愈(退之)

柳巷還飛絮。春餘幾許時。
吏人休報事。公作送春詩。

柳巷還飛絮。春餘幾許時ぞ。
吏人事を報ずるを休めよ。公春を送るの詩を
作る。

題楚昭王廟

楚の昭王の廟に題す

邱墳滿目衣冠盡。城闕連雲草樹荒。
猶有國人懷舊德。一間茅屋祭昭王。

邱墳滿目衣冠盡く。城闕雲に連りて草樹荒る。
猶ほ國人の舊德を懷ふ有り。一間の茅屋昭王
を祭る。

過鴻溝

鴻溝を過ぐ

柳巷 題楚昭王廟 過鴻溝

龍疲虎困割川原。億萬蒼生性命存。
誰勸君王回馬首。真成一擲賭乾坤。

龍疲虎困川原を割く。億萬の蒼生性命存す。
誰か君王に勸めて馬首を回さしむ。真成一擲
乾坤を賭す。

左遷至藍關示姪孫湘

左遷せられて藍關に至り姪孫湘に示す

一封朝奏九重天。夕貶潮州路八千。
欲爲聖明除弊事。肯將衰朽惜殘年。
雲橫秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。
知汝遠來應有意。好收我骨瘴江邊。

一封朝に奏す九重の天。夕に潮州に貶せらる
路八千。聖明の爲に弊事を除かんと欲す。肯
て衰朽を將て殘年を惜まんや。雲は秦嶺に横
はつて家何くにか在る。雪は藍關を擁して馬
前まず。知る汝が遠く來る應に意有るべし。
好し我が骨を收めよ瘴江の邊。

符讀書城南

符書を城南に讀む

木之就規矩。在梓匠輪輿。
人之能爲人。由腹有詩書。
詩書勤乃有。不勤腹空虛。
欲知學之力。賢愚同一初。
由其不能學。所入途異閭。
兩家各生子。提孩巧相如。
少長聚嬉戲。不殊同隊魚。
年至十二三。頭角稍相疎。
二十漸乖張。清溝映汙渠。
三十骨骼成。乃一龍一豬。

木の規矩に就くは、梓匠輪輿に在り。
人の能く人たるは、腹に詩書有るに由る。
詩書勤むれば乃ち有り。勤めざれば腹空虛。
學の力を知らんと欲せば、賢愚同一初。
其の學ぶこと能はざるに由りて、入る所途に
閭を異にす。
兩家各子を生めり。提孩にして巧は相如け
り。
少く長じて聚りて嬉戲す。同隊の魚に殊なら
ず。
年十二三に至りて、頭角稍相疎なり。
二十にして漸く乖張し、清溝汙渠に映す。
三十にして骨骼成り、乃ち一は龍一は猪。

飛黃騰踏去 不能顧蟾蜍
 一爲馬前卒 鞭背生蟲蛆
 一爲公與相 潭潭府中居
 問之何因爾 學與不學歟
 金璧雖重寶 費用難貯儲
 學問藏之身 身在則有餘
 君子與小人 不繫父母且
 不見公與相 起身自犁鋤
 不見三公後 寒饑出無驢
 文章豈不貴 經訓乃蓄畬

飛黃騰踏し去りて、蟾蜍を顧ること能はず。
 一は馬前の卒と爲りて、背に鞭ちて蟲蛆を生ず。

一は公と相と爲り、潭潭たり府中の居。之を問ふ何に因りて爾る、學ぶと學ばざると歟。

金璧は重寶なりと雖も、費し用ひて貯儲し難し。
 學問之を身に藏めば、身在れば則ち餘り有り。

君子と小人と、父母に繫らず。
 見ずや公と相とを。身を起すこと犁鋤よりす。

見ずや三公の後、寒饑出づるに驢無きを。
 文章豈貴からざらん。經訓乃ち蓄畬。

潢潦無根源 朝滿夕已除
 人不通古今 馬牛而襟裾
 行身陷不義 況望多名譽
 時秋積雨霽 新涼入郊墟
 燈火稍可親 簡編可卷舒
 豈不旦夕念 爲爾惜居諸
 恩義有相奪 作詩勸躊躇

楓橋夜泊

張

繼(懿孫)

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。

楓橋夜泊

月落ち烏啼いて霜天に滿つ。江楓漁火愁眠に

姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。

對す。姑蘇城外の寒山寺。夜半の鐘聲客船に到る。

興買島閑遊

興買島と閑遊す

張

籍(文昌)

水北原南草色新。雪消風暖不生塵。
城中車馬應無數。能解閑行有幾人。

水北原南草色新なり。雪消え風暖にして塵を生ぜず。城中の車馬應に無數なるべきも、能く閑行を解するは幾人か有る。

秋思

洛陽城裏見秋風。欲作家書意萬重。
復恐匆匆說不盡。行人臨發又開封。

洛陽城裏に秋風を見る。家書を作らんと欲して意萬重。復恐る匆匆説き盡さざるを。行人發するに臨んで又封を開く。

哀孟寂

孟寂を哀しむ

曲江院裏題名處。十九人中最少年。
今日風光君不見。杏花零落寺門前。

曲江院裏題名の處、十九人中最も少年。今日風光君見えず。杏花零落す寺門の前。

尋隱者不遇

隱者を尋ねるに遇はず

賈

島(浪仙)

松下問童子。言師採藥去。
只在此山中。雲深不知處。

松下童子に問ふ。言ふ師は藥を採り去る。只此山中に在らん。雲深くして處を知らず。

渡桑乾

桑乾を渡る

哀孟寂 尋隱者不遇 渡桑乾

和張僕射塞下曲 寒食

客舍并州已十霜。歸心日夜憶咸陽。
無端更渡桑乾水、卻望并州是故鄉。

客舍并州已十霜。歸心日夜憶咸陽。無端更渡桑乾水、卻望并州是故鄉。

一九四

和張僕射塞下曲 張僕射の塞下曲を和す

盧

綸(允言)

月黑雁飛高。單于遠遁逃。
欲將輕騎逐、大雪滿弓刀。

月黒くして雁飛ぶこと高し。單于遠く遁逃す。輕騎を將て逐はんと欲すれば、大雪弓刀に滿つ。

寒食

韓

翹(君平)

春城無處不飛花。寒食東風御柳斜。
日暮漢宮傳蠟燭。青煙散入五侯家。

春城處として飛花ならざるは無し。寒食東風御柳斜なり。日暮漢宮蠟燭を傳ふ。青煙は散じて五侯の家に入る。

遊子吟

孟

郊(東野)

慈母手中線、遊子身上衣。
臨行密密縫、意恐遲遲歸。
難將寸艸心、報得三春暉。

慈母手中の線は、遊子身上の衣。臨行に臨んで密密に縫ふ。意に恐る遲遲として歸らんことを。寸艸の心を將て、三春の暉に報じ得難し。

石頭城

劉

禹

錫(夢得)

山圍故國周遭在。潮打空城寂寞回。
淮水東邊舊時月、夜深還過女牆來。

山は故國を圍んで周遭して在り。潮は空城を打つて寂寞として回る。淮水東邊舊時の月、夜深くして還女牆を過ぎて來る。

遊子吟 石頭城

自朗州至京戲贈看花諸君

朗州より京に至り戲に花を看る諸君に贈る

紫陌紅塵拂面來。無人不道看花回。
玄都觀裏桃千樹。盡是劉郎去後栽。

紫陌紅塵面を拂うて來る。人の花を看て回ると道はざるは無し。玄都觀裏の桃千樹、盡く是れ劉郎去つて後に栽う。

秋思

自古逢秋悲寂寥。我言秋日勝春朝。
晴空一鶴排雲上。便引詩情到碧霄。

古より秋に逢うて寂寥を悲む。我は言ふ秋日春朝に勝ると。晴空一鶴雲を排して上る。便ち詩情を引ききて碧霄に到らしむ。

逢俠者 俠者に逢ふ

錢

起(仲文)

燕趙悲歌士。相逢劇孟家。
寸心言不盡。前路日將斜。

燕趙悲歌の士。相逢ふ劇孟の家。寸心言ひ盡さず。前路日將に斜ならんとす。

歸雁

瀟湘何事等閒回。水碧沙明兩岸苔。
二十五絃彈夜月。不勝清怨卻飛來。

瀟湘より何事ぞ等閒に回る。水碧に沙明かなり兩岸の苔。二十五絃夜月に彈ぜば、清怨に勝へず卻飛せるならん。

夜上受降城聞笛

夜上受降城に上りて笛を聞く 李

益(君虞)

回樂峯前沙似雪。受降城外月如霜。
不知何處吹蘆管。一夜征人盡望鄉。

回樂峯前沙雪に似、受降城外月霜の如し。知らず何れの處にか蘆管を吹く。一夜征人盡く郷を望む。

歸雁 夜上受降城聞笛

過鄭山人所居 重送裴郎中貶吉州 故行宮

過鄭山人所居 鄭山人之所居に過る

劉長卿(文房)

寂寂孤鶯啼杏園、寥寥一犬吠桃源。
落花芳草無尋處、萬壑千峯獨閉門。

寂寂たる孤鶯杏園に啼き、寥寥たる一犬桃源に吠ゆ。落花芳草尋ぬる處無し。萬壑千峯獨り門を閉づ。

重送裴郎中貶吉州 重ねて裴郎中が吉州に貶せらるるを送る

猿啼客散暮江頭、人自傷心水自流。
同作逐臣君更遠、青山萬里一孤舟。

猿啼き客散ず暮江の頭。人は自ら心を傷ましめ水は自ら流る。同じく逐臣と作つて君更に遠し。青山萬里一孤舟。

故行宮

王建(仲初)

寥落故行宮、宮花寂寞紅。
白頭宮女在、閑坐說玄宗。

寥落たり故行宮。宮花寂寞として紅なり。白頭宮女在り。閑坐して玄宗を説く。

中秋望月 中秋月を望む

中庭地白樹栖鴉、零露無聲濕桂花。
今夜月明人盡望、不知秋思在誰家。

中庭地白くして樹鴉を栖ましむ。零露聲無く桂花を濕す。今夜月明人盡く望む。知らず秋思誰が家にか在る。

城東早春

楊巨源(景山)

詩家清景在新春、柳嫩鶯黃色未勻。
若待上林花似錦、出門皆是看花人。

詩家の清景は新春に在り。柳嫩にして鶯黄色未だ勻はず。若し上林の花錦に似るを待たば、門を出づる皆是れ花を看るの人。

中秋望月 城東早春

折楊柳 商山路有感 夜雨

折楊柳

水邊楊柳綠烟絲。立馬煩君折一枝。唯有春風最相惜、慙慙更向手中吹。

水邊の楊柳綠烟の絲。馬を立て君を煩はして一枝を折る。唯春風の最も相惜む有りて、慙慙に更に手中に向つて吹く。

商山路有感

商山路の路感有り

白 居 易(樂天)

萬里路長在。六年今始歸。所經多舊館、太半主人非。

萬里路長に在り。六年今始めて歸る。所經る所舊館多きも、太半主人非なり。

夜雨

早蛩啼復歇。殘燈滅又明。隔窗知夜雨。芭蕉先有聲。

早蛩啼いて復歇む。殘燈滅又明。窗を隔てて夜雨を知る。芭蕉先づ聲有り。

夜雪

已訝衾枕冷。復見窗戶明。夜深知雪重。時聞折竹聲。

已に訝る衾枕の冷かなるを。復見る窗戶の明かなるを。夜深くして雪の重きを知る。時に聞く折竹の聲。

香山避暑二絕

香山暑を避く二絶

六月灘聲如猛雨。香山樓北暢師房。夜深起倚闌干立。滿耳潺湲滿面涼。

六月灘聲猛雨の如し。香山樓北暢師の房。夜深くして起つて闌干に倚つて立てば、滿耳の潺湲滿面の涼。

夜雪 香山避暑二絶

其二

紗巾草履竹疎衣。晚下香山蹋翠微。
一路涼風十八里。臥乘籃輿醉中歸。

紗巾草履竹疎の衣。晩に香山を下りて翠微を
蹋む。一路の涼風十八里。臥して籃輿に乗じ
て醉中に歸る。

早入皇城贈王留守僕射

早に皇城に入りて王留守僕射に贈る

津頭殘月曉沈沈。風露凄清禁署深。
城柳宮槐謾搖落。悲愁不到貴人心。

津頭の殘月曉沈沈。風露凄清として禁署深
し。城柳宮槐謾に搖落するも、悲愁は到ら
ず貴人の心。

村夜

霜草蒼蒼蟲切切。村南村北行人絕。
獨出門前望野田。月明蕎麥花如雪。

霜草蒼蒼として蟲切切。村南村北行人絶ゆ。
獨り門前に出でて野田を望めば、月明かにし
て蕎麥花雪の如し。

邯鄲至夜思親

邯鄲至夜親を思ふ

邯鄲驛裏逢冬至。抱膝燈前影伴身。
憶得家中夜深坐。還應說著遠遊人。

邯鄲驛裏冬至に逢ふ。膝を抱きて燈前影身に
伴ふ。憶ひ得たり家中夜深けて坐し、還應に
遠遊の人を説著するなるべし。

菊花

一夜新霜著瓦輕。芭蕉新折敗荷傾。
耐寒唯有東籬菊。金粟花開曉更清。

一夜新霜瓦に著きて輕し。芭蕉は新に折れて
敗荷は傾く。寒に耐ふるは唯東籬の菊のみ有
りて、金粟の花は開きて曉更に清し。

對酒 燕子樓 王昭君

對酒 酒に對す

蝸牛角上爭何事。石火光中寄此身。
隨富隨貧且歡樂。不開口笑是癡人。

蝸牛角上何事を争ふ。石火光中此身を寄す。
富に隨ひ貧に隨ひて且つ歡樂せん。口を開きて笑はざるは是れ癡人。

燕子樓

滿窗明月滿簾霜。被冷燈殘拂臥牀。
燕子樓中霜月夜。秋來唯爲一人長。

滿窗の明月滿簾の霜。被冷かに燈殘して臥牀を拂ふ。燕子樓中霜月の夜、秋來唯一人の爲に長し。

王昭君

漢使卻回憑寄語。黃金何日贖蛾眉。
君王若問妾顏色。莫道不如宮裏時。

漢使卻回憑りて語を寄す。黃金何れの日か蛾眉を贖はん。君王若し妾が顏色を問はば、道ふこと莫かれ宮裏の時に如かずと。

春晚詠懷贈皇甫朗之

春晚懷を詠じて皇甫朗之に贈る

艷陽時節又蹉跎。遲暮光陰復若何。
一歲平分春日少。百年通計老時多。
多中更被愁牽引。少處兼遭病折磨。
賴有銷憂治悶藥。君家濃耐我狂歌。

艷陽の時節又蹉跎たり。遲暮の光陰復若何。一歲平分すれば春日少く、百年通計すれば老時多し。多中更に愁に牽引せられ、少處兼て病に折磨せらる。賴に憂を銷し悶を治するの藥有り。君が家の濃耐我が狂歌。

香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁

香爐峯下新に山居を卜し

草堂初めて成る偶東壁に題す

春晚詠懷贈皇甫朗之 香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁

放言

日高睡足猶慵起。小閣重衾不怕寒。
遺愛寺鐘敲枕聽。香爐峯雪撥簾看。
匡廬便是逃名地。司馬仍爲送老官。
心泰身寧是歸處。故鄉何獨在長安。

放言

贈君一法決狐疑。不用鑽龜與祝著。
試玉要燒滿三日。辨材須待七年期。
周公恐懼流言日。王莽謙恭下士時。
若使當年身便死。至今真僞有誰知。

日高く睡足つて猶ほ起くるに慵し。小閣衾を重ねて寒を怕れず。遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴き、香爐峯の雪は簾を撥けて看る。匡廬便是れ名を逃るるの地。司馬仍ほ老を送るの官と爲す。心泰に身寧ければ是れ歸處。故郷何ぞ獨り長安に在らん。

二〇六

君に一法を贈りて狐疑を決せしむ。鑽龜と祝著とを用ひず。玉を試むるには焼くこと三日に満たんことを要し、材を辨するには須らく七年期を待つべし。周公恐懼す流言の日。王莽謙恭士に下る時。若し當年身便ち死せしめば、今に至つて眞僞誰有つてか知らん。

燕詩示劉叟

燕の詩劉叟に示す

叟有愛子背叟逃去。叟甚悲念之。叟少年時亦嘗如是。故作燕詩以喻。叟に愛子有り、叟に背きて逃れ去る。叟甚だ悲みて之を念ふ。叟少年の時亦嘗て是の如し。故に燕の詩を作りて以て諭す。

梁上有雙燕。翩翩雄與雌。
銜泥兩椽間。一巢生四兒。
四兒日夜長。索食聲孜孜。
青蟲不易捕。黃口無飽期。
嘴爪雖欲弊。心力不知疲。

燕詩示劉叟

梁上に雙燕有り。翩翩たり雄と雌と。泥を銜む兩椽の間。一巢に四兒を生ず。四兒日夜に長じ、食を索めて聲孜孜たり。青蟲捕へ易からず。黃口飽く期無し。嘴爪弊れんと欲すと雖も、心力疲るるを知らず。

二〇七

須臾千來往。猶恐巢中餓。辛勤三十日。母瘦雛漸肥。喃喃教言語。一一刷毛衣。一旦羽翼成。引上庭樹枝。舉翅不回顧。隨風四散飛。雌雄空中鳴。聲盡呼不歸。卻入空巢裏。啁啾終夜悲。燕燕爾勿悲。爾當返自思。思爾爲雛日。高飛背母時。當時父母念。今日爾應知。

須臾にして千來往。猶ほ恐る巢中に餓ゑんことを。辛勤三十日。母瘦せて雛漸く肥ゆ。喃喃として言語を教へ、一一毛衣を刷ふ。一旦羽翼成り、引いて庭樹の枝に上る。翅を舉げて回顧せず、風に随つて四に散飛す。雌雄空中に鳴き、聲盡くるまで呼べども歸らず。卻りて空巢の裏に入りて、啁啾として終夜悲む。燕燕爾悲むこと勿かれ。爾當に返りて自ら思ふべし。思ふ爾が雛たりし日、高飛して母に背きし時。當時父母の念、今日爾應に知るべし。

慈烏夜啼

慈烏失其母。啞啞吐哀音。晝夜不飛去。經年守故林。夜夜夜半啼。聞者爲沾襟。聲中如告訴。未盡反哺心。百鳥豈無母。爾獨哀怨深。應是母慈重。使爾悲不任。昔有吳人去。母歿喪不臨。哀哉若此輩。其心不如禽。

慈烏夜啼

慈烏其の母を失ひ、啞啞として哀音を吐く。晝夜飛び去らず。年を経て故林を守る。夜夜夜半に啼き、聞く者爲に襟を沾す。聲中告訴するが如し、未だ反哺の心を盡さざるを。百鳥豈母無からんや。爾獨り哀怨深し。應に是れ母の慈重く、爾をして悲みて任へざらしむるなるべし。昔吳起の去る有り。母歿して喪に臨せず。哀哉此の若き輩、其の心禽にだにも如かず。

八月十五日夜禁中獨直對月憶元九

慈烏復慈烏、鳥中之曾參。

慈烏復慈烏、鳥中之曾參なり。

二一〇

八月十五日夜禁中獨直對月憶元九

八月十五日夜禁中獨直

月に對して元九を憶ふ

銀臺金闕夕沈沈。獨宿相思在翰林。
三五夜中新月色。二千里外故人心。
渚宮東面煙波冷。浴殿西頭鐘漏深。
猶恐清光不同見。江陵卑濕足秋陰。

銀臺金闕夕に沈沈。獨宿相思翰林に在り。
三五夜中新月の色。二千里外故人の心。
渚宮の東面煙波冷かに、浴殿の西頭鐘漏深し。
猶ほ恐る清光同じく見ざるを。江陵は卑濕秋陰足る。

太行路

太行之路能摧車。若比君心是坦途。
巫峽之水能覆舟。若比君心是安流。
君心好惡苦不常。好生毛髮惡生瘡。
與君結髮未五載。豈期牛女爲參商。
古稱色衰相棄背。當時美人猶怨悔。
何況如今鸞鏡中。妾顏未改君心改。
爲君熏衣裳。君聞蘭麝不馨香。
爲君盛容飾。君看珠翠無顏色。
行路難。難重陳。人生莫作婦人身。
百年苦樂由他人。行路難。難於山險於水。

太行之路能く車を摧く。若し君の心に比すれば是れ坦途。巫峽の水能く舟を覆す。若し君の心に比すれば是れ安流。君が心の好悪苦だ常ならず。好すれば毛髮を生じ悪めば瘡を生ず。君と結髮未だ五載ならざるに、豈期せんや牛女の參商と爲らんとは。古に稱す色衰ふれば相棄背すと。當時の美人猶ほ怨悔す。何況や如今鸞鏡の中。妾が顔未だ改まらざるに君が心改まる。君の爲に衣裳を熏すれば、君蘭麝を聞きて馨香とせず。君が爲に容飾を盛にすれば、君珠翠を見て顔色無しとす。行路難。重ねて陳べ難し。人生婦人の身と作ること莫かれ。百年の苦樂他人に由る。行路難。山よりも難く水よりも險し。獨り人間夫と妻とのみならず。近代の君臣も亦此の如

太行路

二一一

不獨人閒夫與妻。近代君臣亦如此。君不見左納言右納史。朝承恩暮賜死。行路難。不在水不在山。唯在人情反覆間。

琵琶行

潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。主人下馬客在船。舉酒欲飲無管絃。醉不成歡慘將別。別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲。主人忘歸客不發。尋聲暗問彈者誰。琵琶聲停欲語遲。

し。君見すや左は納言右は納史。朝に恩を承けて暮に死を賜ふ。行路難。水に在らず山に在らず。唯人情反覆の間に在り。

潯陽江頭夜送客を送る。楓葉荻花秋瑟瑟。主人は馬より下りて客は船に在り。酒を舉げて飲まんとして欲するに管絃無し。醉ひて歡を成さず。別時として將に別れんとす。別る時茫茫として江月を浸す。忽ち聞く水上琵琶の聲。主人歸るを忘れ客發せず。聲を尋ねて暗に問ふ。彈する者は誰ぞと。琵琶聲停んで語らんと欲す。

移船相近邀相見。添酒回燈重開宴。千呼萬喚始出來。猶抱琵琶半遮面。轉軸撥絃三兩聲。未成曲調先有情。絃絃掩抑聲聲思。似訴平生不得志。低眉信手續續彈。說盡心中無限事。輕攏慢撚抹復挑。初爲霓裳後六么。大絃嘈嘈如急雨。小絃切切如私語。嘈嘈切切錯雜彈。大珠小珠落玉盤。閒關鶯語花底滑。幽咽泉流水下灘。水泉冷澁絃凝絕。凝絕不通聲暫歇。

琵琶行

る遅し。船を移して相近き邀へて相見。酒を添へ燈を回らし重ねて宴を開く。千呼萬喚始めて出で來り、猶ほ琵琶を抱きて半面を遮る。軸を轉じ絃を撥する三兩聲。未だ曲調を成さず先づ情有り。絃絃掩抑聲聲あり。訴ふるに似たり平生志を得ざるを。眉を低れ手に信せて續續として彈ず。説き盡す心中限り無きの事。輕く攏へ慢く撚りて抹して復挑ぐ。初は霓裳を爲し後は六么。大絃は嘈嘈として急雨の如く、小絃は切切として私語の如し。嘈嘈切切錯雜して彈じ、大珠小珠玉盤に落つ。閒關たる鶯語花底に滑かに、幽咽せる泉流水灘を下る。水泉冷澁絃凝絶し、凝絶通ぜず聲暫く歇む。別に幽愁暗恨の生ずる有り。

別有幽愁暗恨生。此時無聲勝有聲。
銀餅乍破水漿迸，鐵騎突出刀鎗鳴。
曲終收撥當心畫，四絃一聲如裂帛。
東船西舫悄無言，唯見江心秋月白。
沈吟收撥插絃中，整頓衣裳起斂容。
自言本是京城女，家在蝦蟇陵下住。
十三學得琵琶成，名屬教坊第一部。
曲罷常教善才服，粧成每被秋娘妬。
五陵年少爭纏頭，一曲紅綃不知數。
鈿頭銀篋擊節碎，血色羅裙翻酒汙。

此時聲無きは聲有るに勝れり。銀餅乍ち破れて水漿迸り、鐵騎突出刀鎗鳴る。曲終つて撥を收め心に當てて畫す。四絃一聲裂帛の如し。東船西舫悄として言無く、唯見る江心秋月の白きを。
沈吟撥を收めて絃中に插み、衣裳を整頓して起つて容を斂む。自ら言ふ本是れ京城の女。家は蝦蟇陵下に在りて住す。十三琵琶を學び得て成り、名は屬す教坊の第一部。
曲罷みて常に善才をして服せしむ。粧成りて毎に秋娘に妬まる。五陵の年少争うて纏頭し、一曲の紅綃數を知らず。鈿頭銀篋を擊ちて碎け、血色の羅裙酒を翻して汙す。

今年歡笑復明年。秋月春風等閑度。
弟走從軍阿姨死，暮去朝來顏色故。
門前冷落鞍馬稀，老大嫁作商人婦。
商人重利輕別離，前月浮梁買茶去。
去來江口守空船，遶船明月江水寒。
夜深忽夢少年事，夢啼妝淚紅闌干。
我聞琵琶已歎息，又聞此語重唧唧。
同是天涯淪落人，相逢何必曾相識。
我從去年辭帝京，謫居臥病潯陽城。
潯陽地僻無音樂，終歲不聞絲竹聲。

今年歡笑復明年。秋月春風等閑に度る。弟は走りて軍に從ひ阿姨は死す。暮去り朝來りて顏色故る。門前冷落して鞍馬稀なり。老大嫁して商人の婦と作る。商人は利を重んじて別離を輕んじ、前月浮梁に茶を買ひ去る。江口に去來して空船を守る。船を遶る明月江水寒し。夜深くして忽ち夢む少年の事。夢に啼けば妝淚紅闌干。
我琵琶を聞きて已に歎息し、又此語を聞きて重ねて唧唧。同じく是れ天涯淪落の人、相逢ふ何ぞ必ずしも曾て相識らんや。
我去年帝京を辭してより、謫居病に臥す潯陽城。潯陽地僻にして音樂無く、終歲聞かず絲竹の聲。住して潯江に近くして地低濕。黃蘆

住近溢江地低濕。黃蘆苦竹繞宅生。
 其閒旦暮聞何物。杜鵑啼血猿哀鳴。
 春江花朝秋月夜。往往取酒還獨傾。
 豈無山歌與村笛。嘔啞嘲哳難爲聽。
 今夜聞君琵琶語。如聽仙樂耳暫明。
 莫辭更坐彈一曲。爲君翻作琵琶行。
 感我此言良久立。卻坐促絃絃轉急。
 淒淒不似向前聲。滿座重聞皆掩泣。
 就中泣下誰最多。江州司馬青衫濕。

苦竹宅を繞りて生ず。其の閒旦暮に何物をか
 聞く。杜鵑血に啼き猿哀鳴す。春江の花朝秋
 月の夜。往往酒を取りて還獨り傾く。豈山歌
 と村笛と無からんや。嘔啞嘲哳聽を爲し難し。
 今夜君が琵琶の語を聞き、仙樂を聴くが如く
 耳暫く明かなり。辭する莫かれ更に坐して一
 曲を彈するを。君が爲に翻して琵琶行を作ら
 ん。
 我が此言に感じて良久しくして立ち、卻坐絃
 を促して絃轉た急なり。淒淒として向前の聲
 に似ず。滿座重ねて聞きて皆泣を掩ふ。就中
 泣下る誰か最も多き。江州の司馬青衫濕ふ。

聞白樂天左降江州司馬

白樂天が江州の司馬に左降するを聞く

元

稹(微之)

殘燈無焰影幢幢。此夕聞君謫九江。
 垂死病中驚坐起。暗風吹雨入寒窗。

殘燈無焰影幢幢たり。此夕聞く君が九江に
 謫せらるるを。垂死の病中驚いて坐起す。
 暗風雨を吹いて寒窗に入る。

江雪

柳

宗

元(子厚)

千山鳥飛絕。萬徑人蹤滅。
 孤舟蓑笠翁。獨釣寒江雪。

千山鳥飛び絶え、萬徑人蹤滅す。
 孤舟蓑笠の翁、獨り釣る寒江の雪。

夏晝偶作

南州溽暑醉如酒。隱几熟眠開北牖。
日午獨覺無餘聲。山童隔竹敲茶臼。

南州の溽暑酔うて酒の如し。几に隠つて熟眠。
北牖を開く。日午獨り覺めて餘聲無し。山童
竹を隔てて茶臼を敲く。

柳州二月榕葉落盡偶題

宦情羈思共悽悽。春半如秋意轉迷。
山城過雨百花盡。榕葉滿庭鶯亂啼。

宦情羈思共に悽悽。春半秋の如く意轉迷。
山城の過雨百花盡き、榕葉庭に満ちて鶯
亂れ啼く。

漁翁

漁翁夜傍西巖宿。曉汲清湘燃楚竹。
煙銷日出不見人。欸乃一聲山水綠。
迴看天際下中流。巖上無心雲相逐。

漁翁夜西巖に傍うて宿す。曉に清湘を汲んで
楚竹を燃く。煙銷え日出でて人を見ず。欸乃
一聲山水緑なり。天際を廻看して中流を下れ
ば、巖上無心雲相逐ふ。

憫農

農を憫む

李

紳(公垂)

鋤禾日當午。汗滴禾下土。
誰知盤中飧。粒粒皆辛苦。

禾を鋤きて日午に當る。汗は滴る禾下の土。
誰か知らん盤中の飧、粒粒皆辛苦なるを。

蠶婦

逸

名

昨日到城郭。歸來淚滿巾。

昨日城郭に到り、歸來淚巾に滿つ。

憫農 蠶婦

登樂遊原 夜雨寄北

二二〇

遍身綺羅者、不是養蠶人。

遍身綺羅の者、是れ蠶を養ふ人にあらず。

登樂遊原

樂遊原に登る

李商隱(義山)

向晚意不適。驅車登古原。
夕陽無限好。只是近黃昏。

晚に向つて意適はず。車を驅りて古原に登る。
夕陽限り無く好し。只是れ黃昏に近し。

夜雨寄北

夜雨北に寄す

君問歸期未有期。巴山夜雨漲秋池。
何當共翦西牕燭、卻話巴山夜雨時。

君歸期を問ふ未だ期有らず。巴山の夜雨秋池に漲る。何か當に共に西牕の燭を翦つて、卻つて巴山の夜雨を話する時なるべき。

勸酒

酒を勸む

于武陵

勸君金屈卮。滿酌不須辭。
花發多風雨。人生足別離。

君に勸む金屈卮。滿酌辭するを須ひず。
花發いて風雨多し。人生別離足る。

感事

事に感ず

于漬(子漪)

花開蝶滿枝。花謝蝶還稀。
惟有舊巢燕。主人貧亦歸。

花開けば蝶枝に滿つ。花謝すれば蝶還稀なり。
惟舊巢燕有り。主人貧きも亦歸る。

春怨

金昌緒

勸酒 感事 春怨

二二二

山亭夏日 十日菊

打起黃鶯兒、莫教枝上啼。
啼時驚妾夢、不得到遼西。

二二二
黃鶯兒を打起して、枝上に啼かしむること莫かれ。啼く時妾の夢を驚かして、遼西に到ることを得さらしむ。

山亭夏日

高

駢(千里)

綠樹陰濃夏日長。樓臺倒影入池塘。
水晶簾動微風起。一架薔薇滿院香。

緑樹陰濃にして夏日長し。樓臺影を倒にして池塘に入る。水晶簾動きて微風起る。一架の薔薇滿院香し。

十日菊

鄭

谷(守愚)

節去蜂愁蝶不知。曉庭還繞折殘枝。
自緣今日人心別。未必秋香一夜衰。

節去り蜂愁ふるも蝶知らず。曉庭還繞る折殘の枝。自ら今日人心の別なるに緣る。未必秋香一夜に衰へず。

淮上別故人

淮上故人に別る

揚子江頭楊柳春。楊花愁殺渡江人。
數聲風笛離亭晚。君向瀟湘我向秦。

揚子江頭楊柳の春。楊花愁殺す江を渡る人。數聲の風笛離亭の晩。君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ。

社日

王

駕(大用)

鶯湖山下稻梁肥。豚柵雞埒半掩扉。
桑柘影斜秋社散。家家扶得醉人歸。

鶯湖山下稻梁肥。豚柵雞埒半扉を掩ふ。桑柘影斜にして秋社散じ、家家醉人を扶し得て歸る。

旅懷

杜

荀

鶴(彦之)

淮上別故人 社日 旅懷

二二三

春日晏起 華清宮

二二四

月華星彩坐來收。嶽色江聲暗結愁。
半夜燈前十年事。一時和雨到心頭。

月華星彩坐來收まる。嶽色江聲暗に愁を結ぶ。
半夜燈前十年の事。一時雨に和して心頭に到る。

春日晏起

章

莊(端己)

近來中酒起常遲。臥見南山改舊詩。
開戶日高春寂寂。數聲啼鳥上花枝。

近來酒に中りて起くること常に遅し。臥して南山を見て舊詩を改む。戸を開けば日高くして春寂寂。數聲の啼鳥花枝に上る。

華清宮

崔

魯

草遮回磴絕鳴鑿。雲樹深深碧殿寒。
明月自來還自去。更無人倚玉闌干。

草は回磴を遮つて鳴鑿を絶つ。雲樹深深として碧殿寒し。明月自ら來り還自ら去る。更に人の玉闌干に倚る無し。

歸家

家に歸る

杜

牧(樊川)

穉子牽衣問。歸來何太遲。
共誰爭歲月。贏得鬢邊絲。

穉子衣を牽いて問ふ。歸來何ぞ太だ遅き。誰と共に歲月を争ふ。贏ち得たり鬢邊の絲。

清明

清明時節雨紛紛。路上行人欲斷魂。
借問酒家何處有。牧童遙指杏花村。

清明の時節雨紛紛。路上の行人魂を断たんと欲す。借問す酒家は何れの處にか有る。牧童遙に指す杏花の村。

江南春

歸家 清明 江南春

二二五

念昔遊 醉後題僧院

千里鶯啼綠映紅。水村山郭酒旗風。
南朝四百八十寺。多少樓臺煙雨中。

念昔遊

昔遊を念ふ

李白題詩水西寺。古木回巖樓閣風。
半醒半醉遊三日。紅白花開山雨中。

醉後題僧院

醉後僧院に題す

舫船一棹百分空。十歲青春不負公。
今日鬢絲禪榻畔。茶煙輕颺落花風。

千里鶯啼いて綠紅に映ず。水村山郭酒旗の風。南朝四百八十寺。多少の樓臺煙雨の中。

李白詩を題す水西寺。古木回巖樓閣の風。半醒半醉遊ぶ三日。紅白花は開く山雨の中。

舫船一棹百分空し。十歳の青春公に負かず。今日鬢絲禪榻の畔、茶煙輕く颺る落花の風。

山行

遠上寒山石徑斜。白雲生處有人家。
停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花。

秋夕

銀燭秋光冷畫屏。輕羅小扇撲流螢。
天階夜色涼如水。臥看牽牛織女星。

贈別

山行 秋夕 贈別

遠く寒山に上れば石徑斜なり。白雲生ずる處人家有り。車を停めて坐に愛す楓林の晩。霜葉は二月の花よりも紅なり。

銀燭秋光冷畫屏。輕羅の小扇流螢を撲つ。天階の夜色涼水の如し。臥して看る牽牛織女星。

泊秦淮 烏江廟

多情卻似總無情。唯覺尊前笑不成。
蠟燭有心還惜別，替人垂淚到天明。

多情卻似總無情。唯覺尊前笑不成。笑の成らざるを。蠟燭心有り還つて別を惜み、人に替つて涙を垂れて天明に到る。

泊秦淮

秦淮に泊す

煙籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。
商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花。

煙は寒水を籠め月は沙を籠む。夜秦淮に泊して酒家に近し。商女は知らず亡國の恨。江を隔てて猶ほ唱ふ後庭花。

烏江廟

勝敗兵家不可期。包羞忍恥是男兒。
江東子弟多豪俊。卷土重來未可知。

勝敗は兵家も期す可からず。羞を包み恥を忍ぶ是れ男兒。江東の子弟豪俊多し。土を巻いて重ねて來る未だ知る可からず。

題宣州開元寺水閣

宣州開元寺の水閣に題す

六朝文物草連空。天淡雲閑今古同。
鳥去鳥來山色裏。人歌人哭水聲中。
深秋簾幕千家雨。落日樓臺一笛風。
惆悵無因見范蠡。參差煙樹五湖東。

六朝の文物草空に連る。天淡く雲閑に今古同じ。鳥去り鳥來る山色の裏。人歌ひ人哭す水聲の中。深秋簾幕千家の雨。落日樓臺一笛の風。惆悵す范蠡を見るに因無きを。參差たる煙樹五湖の東。

秋思

許

渾(用晦)

琪樹西風枕簟秋。楚雲湘水憶同遊。
高歌一曲掩明鏡。昨日少年今白頭。

琪樹の西風枕簟の秋。楚雲湘水同遊を憶ふ。高歌一曲明鏡を掩ふ。昨日の少年今は白頭。

題宣州開元寺水閣 秋思

經秦始皇墓

秦の始皇の墓を經

龍盤虎踞樹層層。勢入浮雲亦是崩。
一種青山秋草裏。路人惟拜漢文陵。

金陵懷古

玉樹歌殘王氣終。景陽兵合成樓空。
楸梧遠近千官塚。禾黍高低六代宮。
石燕拂雲晴亦雨。江豚吹浪夜還風。
英雄一去豪華盡。唯有青山似洛中。

龍盤虎踞樹層層。勢浮雲に入るも亦是れ崩る。一種青山秋草の裏。路人惟拜す漢文の陵。

玉樹歌殘して王氣終き、景陽兵合して成樓空し。楸梧遠近千官の塚。禾黍高低六代の宮。石燕雲を拂うて晴て亦雨ふり、江豚波を吹いて夜還風ふく。英雄一去豪華盡く。唯青山の洛中に似たる有り。

咸陽城東樓

一上高城萬里愁。蒹葭楊柳似汀洲。
溪雲初起日沈閣。山雨欲來風滿樓。
鳥下綠蕪秦苑夕。蟬鳴黃葉漢宮秋。
行人莫問當年事。故國東來渭水流。

江樓書感

江樓感を書す

獨上江樓思渺然。月光如水水連天。
同來翫月人何處。風景依稀似去年。

咸陽城東樓 江樓書感

趙

嚴(承祐)

一たび高城に上れば萬里愁ふ。蒹葭楊柳汀洲に似たり。溪雲初めて起つて日閣に沈み、山雨來らんと欲して風樓に滿つ。鳥は綠蕪に下る春苑の夕。蟬は黃葉に鳴く漢宮の秋。行人問ふこと莫かれ當年の事。故國東來渭水流る。

獨り江樓に上つて思渺然たり。月光は水の如く水天に連る。同じく來つて月を翫びし人は何れの處ぞ。風景は依稀として去年に似たり。

經汾陽舊宅 長安晚秋

經汾陽舊宅

汾陽の舊宅を經

門前不改舊山河。破虜會輕馬伏波。
今日獨經歌舞地。古槐疏冷夕陽多。

長安晚秋

雲物淒涼拂曙流。漢家宮闕動高秋。
殘星數點雁橫塞。長笛一聲人倚樓。
紫豔半開籬菊淨。紅衣落盡渚蓮愁。
鱸魚正美不歸去。空戴南冠學楚囚。

門前改まらず舊山河。虜を破り會て輕んず馬伏波。今日獨り經歌舞の地。古槐疎冷夕陽多し。

雲物淒涼拂曙を拂つて流る。漢家の宮闕高秋に動く。殘星數點雁塞に横はり、長笛一聲人樓に倚る。紫豔半開きて籬菊淨く、紅衣落ち盡きて渚蓮愁ふ。鱸魚正に美なるも歸去せず、空しく南冠を戴いて楚囚を學ぶ。

己亥歲

澤國江山入戰圖。生民何計樂樵蘇。
憑君莫話封侯事。一將功成萬骨枯。

南遊感興

傷心欲問南朝事。惟見江流去不回。
日暮東風春草綠。鷓鴣飛上越王臺。

長城

己亥歲 南遊感興 長城

曹

松(夢徵)

澤國の江山戰圖に入る。生民何の計か樵蘇を樂まん。君に憑む話る莫かれ封侯の事。一將功成つて萬骨枯る。

寶

鞏(友封)

傷心問はんと欲す南朝の事。惟見る江流の去つて回らざるを。日暮東風春草綠に、鷓鴣飛び上る越王臺。

注

遵(涇縣人)

焚書坑 題鶴林寺

秦築長城比鐵牢。蕃戎不敢逼臨洮。
焉知萬里連雲勢。不及堯階三尺高。

二三四

秦長城を築きて鐵牢に比す。蕃戎敢て臨洮に逼らす。焉ぞ知らんや萬里連雲の勢。及ばず堯階三尺の高きに。

章

碣(孝標之子)

焚書坑

竹帛煙銷帝業虛。關河空鎖祖龍居。
坑灰未冷山東亂。劉項元來不讀書。

竹帛煙銷して帝業虛し。關河空しく鎖す祖龍の居。坑灰未だ冷かならず山東亂る。劉項元來書を讀まず。

李

涉

題鶴林寺

鶴林寺に題す

終日昏昏醉夢閒。忽聞春盡強登山。
因過竹院逢僧話。又得浮生半日閑。

終日昏昏醉夢の閒。忽ち春の盡くるを聞きて強ひて山に登る。竹院に過りて僧に逢うて話するに因つて、又得たり浮生半日の閑。

城西訪友人別墅

城西に友人の別墅を訪ふ

雍

陶(國鈞)

澧水橋西小路斜。日高猶未到君家。
村園門巷多相似。處處春風枳殼花。

澧水橋西小路斜なり。日高くして猶ほ未だ君が家に到らず。村園門巷多くは相似たり。處處の春風枳殼の花。

隴西行

陳

陶(嵩伯)

誓掃匈奴不顧身。五千貂錦喪胡塵。
可憐無定河邊骨。猶是春閨夢裏人。

誓つて匈奴を掃はんとして身を顧みず。五千の貂錦胡塵に喪ふ。憐む可し無定河邊の骨、猶ほ是れ春閨夢裏の人。

廢宅

吳

融(子華)

城西訪友人別墅 隴西行 廢宅

二三五

心中火 寒山道

風飄碧瓦雨摧垣。卻有鄰人爲鎖門。
幾樹好花閑白晝。滿庭荒草易黃昏。
放魚池涸蛙爭聚。棲燕梁空雀自喧。
不獨淒涼眼前事。咸陽一火便成原。

心中火

嗔是心中火。能燒功德林。
欲行菩薩道。忍辱護真心。

寒山道

人間寒山道。寒山路不通。
夏天冰未釋。日出霧朦朧。
似我何由屆。與君心不同。
君心若似我。還得到其中。

旭日

太陽初出光赫赫。千山萬山如火發。
一輪頃刻上天衢。逐退羣星與殘月。

勸學文

旭日 勸學文

風は碧瓦を飄して雨垣を摧く。卻つて鄰人の爲に門を鎖す有り。幾樹の好花白晝に閑に、滿庭の荒草黃昏なり易し。放魚池涸れて蛙争ひ聚まり、棲燕梁空しくして雀自ら喧し。獨り淒涼眼前の事のみならず。咸陽一火便ち原と成る。

寒

山

嗔は是れ心中の火。能く功德林を燒く。菩薩の道を行ぜんと欲せば、忍辱真心を護せよ。

人間寒山の道を問ふ。寒山路通ぜず。夏天冰未だ釋けず。日出でて霧朦朧。似に似るには何に由つてか届らん。君と心同じからず。君が心若し我に似ば、還其の中に到るを得ん。

宋 太

祖

太陽初て出でて光赫赫。千山萬山火の發するが如し。一輪頃刻天衢に上る。逐退す羣星と殘月と。

眞 宗 皇 帝

偶成

富家不用買良田。書中自有千鍾粟。
安居不用架高堂。書中自有黃金屋。
出門莫恨無人隨。書中車馬多如簇。
娶妻莫恨無良媒。書中有女顏如玉。
男兒欲遂平生志。六經勤向窗前讀。

偶成

雲淡風輕近午天、傍花隨柳過前川。
旁人不識余心樂。將謂偷閑學少年。

家を富ますに良田を買ふことを用ひされ。書中自ら千鍾の粟有り。居を安んずるに高堂を架することを用ひされ。書中自ら黄金の屋有り。門を出づるに人の随ふ無きことを恨むる莫かれ。書中車馬多くして簇るが如し。妻を娶るに良媒無きを恨むること莫かれ。書中女有り。顔玉の如し。男兒平生の志を遂げんと欲せば、六經勤めて窗前に向つて讀め。

程

顯(明道)

雲淡く風輕し午に近きの天、花に傍ひ柳に随つて前川を過ぐ。旁人は識らず余が心の樂。將に閑を偷んで少年を學ぶと謂はんとす。

秋日偶成二首 錄一

閑來無事不從容。睡覺東窗日已紅。
萬物靜觀皆自得。四時佳興與人同。
道通天地有形外。思入風雲變態中。
富貴不淫貧賤樂。男兒到此是英雄。

清夜吟

月到天心處。風來水面時。
一般清意味。料得少人知。

秋日偶成二首 清夜吟

邵

雍(康節)

閑來事の從容ならざるは無し。睡覺めて東窗日已に紅なり。萬物靜觀すれば皆自得。四時の佳興人と同じ。道は通ず天地有形の外。思入る風雲變態の中。富貴にして淫せず貧賤にして樂む。男兒此に到らば是れ英雄。

月天心に到る處。風水面に來る時。

一般清意味。料り得たり人の知る少なるを。

安樂窩中吟

安樂窩中春欲歸。春歸忍賦送春詩。
雖然春老難牽復、卻有夏初能就移。
飲酒莫教成酩酊。賞花慎勿至離披。
人能知得此般事、焉有閑愁到兩眉。

初夏

四月清和雨乍晴。南山當戶轉分明。
更無柳絮因風起、惟有葵花向日傾。

安樂窩中春歸らんと欲す。春歸りて賦するに忍びんや春を送るの詩。然く春老いて牽復し難しと雖も、卻りて夏初の能く就き移る有り。酒を飲みて酩酊を成さしむる莫かれ。花を賞して慎みて離披に至る勿かれ。人能く此般の事を知り得ば、焉ぞ閑愁の兩眉に到る有んや。

司馬 光(君實)

四月清和雨乍晴。南山當戶轉分明。更無柳絮因風起、惟有葵花向日傾。

夏日西齋卽事

榴花映葉未全開。槐影沈沈雨勢來。
小院地偏人不到。滿庭鳥迹印蒼苔。

曉行

老去功名意轉疎。獨騎瘦馬取長途。
孤村到曉猶燈火。知有人家夜讀書。

宿西門外

西門外に宿す

夏日西齋卽事 曉行 宿西門外

榴花葉に映じて未だ全く開かず。槐影沈沈として雨勢來る。小院地偏して人到らず。滿庭の鳥迹蒼苔に印す。

晁冲之(叔用)

老い去つて功名意轉た疎なり。獨り瘦馬に騎して長途を取る。孤村曉に到つて猶ほ燈火。知る人家に夜書を讀む有るを。

晁端有(君成)

梅花 夜直

寒林殘日欲棲鳥。壁裏青燈乍有無。
小雨惜惜人假寐。臥聽疲馬齧殘芻。

寒林殘日鳥を棲ましめんと欲す。壁裏の青燈
乍ち有無。小雨惜惜として人假寐す。臥して
聽く疲馬の殘芻を齧むを。

二四二

梅花

牆角數枝梅。凌寒獨自開。
遙知不是雪。爲有暗香來。

牆角數枝の梅。寒を凌いで獨り自ら開く。
遙に知る是れ雪ならざるを。暗香有つて來る
が爲なり。

王安石(半山)

夜直

金爐香燼漏聲殘。剪剪輕風陣陣寒。
春色惱人眠不得。月移花影上闌干。

金爐香燼して漏聲殘す。剪剪たる輕風陣陣寒
し。春色人を惱まして眠り得ず。月は花影
を移して闌干に上す。

鍾山

澗水無聲遠竹流。竹西花草弄春柔。
茅簷相對坐終日。一鳥不啼山更幽。

澗水聲無く竹を遠つて流る。竹西の花草春柔
を弄す。茅簷相對して坐する終日。一鳥啼か
ず山更に幽なり。

書湖陰先生壁

湖陰先生の壁に書す

茆簷長掃靜無苔。花木成畦手自栽。
一水護田將綠繞。兩山排闥送青來。

茆簷長へに掃うて靜かにして苔無し。花木
畦を成して手自ら栽う。一水田を護して綠を
將つて繞り、兩山闥を排して青を送りて來る。

初夏即事

鍾山 書湖陰先生壁 初夏即事

石梁茅屋在灣碕。流水濺濺度兩陂。晴日暖風生麥氣、綠陰幽草勝花時。

石梁茅屋灣碕に在り。流水濺濺として兩陂に度る。晴日暖風麥氣を生じ、綠陰幽草花時に勝る。

勸學文

讀書不破費。讀書萬倍利。書顯官人才。書添君子智。有即起書樓。無即致書櫃。窗前看古書。燈下尋書義。貧者因書富。富者因書貴。愚者得書賢。賢者因書利。

書を讀みて破費せず。書を讀めば萬倍の利あり。書は官人の才を顯し、書は君子の智を添ふ。有らば即ち書樓を起てよ。無くば即ち書櫃を致せ。窗前に古書を見て、燈下に書義を尋ぬ。貧しき者は書に因て富み、富む者は書に因て貴し。愚なる者は書を得て賢なり。賢き者は書に因て利す。

只見讀書榮。不見讀書墜。賣金買書讀。讀書買金易。好書卒難逢。好書真難致。奉勸讀書人。好書在心記。

只書を讀んで榮ゆるを見る。書を讀んで墜るるを見ず。金を賣つて書を買ひて讀め。書を讀みて金を買ふは易し。好書は卒に逢ひ難し。好書は眞に致し難し。讀書の人に勸め奉る。好書は心に記するに在り。

春夜

春宵一刻直千金。花有清香月有陰。歌管樓臺聲細細。鞦韆院落夜沈沈。

春宵一刻直千金。花に清香有り月に陰有り。歌管樓臺聲細細。鞦韆院落夜沈沈。

蘇

軾(東坡)

和孔密州東欄梨花

孔密州の東欄の梨花に和す

春夜 和孔密州東欄梨花

寒食夜 惠崇春江晚景

二四六

梨花淡白柳深青。柳絮飛時花滿城。
惆悵東欄一株雪。人生看得幾清明。

梨花は淡白柳は深青。柳絮飛ぶ時花城に滿つ。
惆悵す東欄一株の雪。人生看得るは幾清明。

寒食夜

漏聲透入碧窗紗。人靜鞦韆影半斜。
沈麝不燒金鴨冷。淡雲籠月照梨花。

漏聲透りて入る碧窗紗。人靜かにして鞦韆影
半斜なり。沈麝燒かず金鴨冷か。淡雲月を
籠めて梨花を照す。

惠崇春江晚景

竹外桃花三兩枝。春江水暖鴨先知。
蒹蒿滿地蘆芽短。正是河豚欲上時。

竹外の桃花三兩枝。春江水暖かにして鴨先
づ知る。蒹蒿地に滿ちて蘆芽短し。正に是れ
河豚の上らんと欲する時。

溪陰堂

白水滿時雙鷺下。綠槐高處一蟬吟。
酒醒門外三竿日。臥看溪南十畝陰。

白水滿つる時雙鷺下り、綠槐高き處一蟬吟
す。酒は醒む門外三竿の日。臥して看る溪南
十畝の陰。

六月二十七日望湖樓醉書五絕

錄一

黑雲翻墨未遮山。白雨跳珠亂入船。
卷地風來忽吹散。望湖樓下水如天。

黒雲墨を翻して未だ山を遮らず。白雨珠を跳
して亂れて船に入る。地を卷く風來つて忽ち
吹き散す。望湖樓下水天の如し。

飲湖上初晴後雨二首 錄一

湖上に飲す、初は晴れ後は雨ふる

淮上早發 中秋月

水光激灩晴偏好、山色空濛雨亦奇。
若把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜。

水光激灩として晴偏に好く、山色空濛として雨も亦奇なり。若し西湖を把つて西子に比すれば、淡粧濃抹總て相宜し。

二四八

淮上早發

澹月傾雲曉角哀。小風吹水碧鱗開。
此生定向江湖老。默數淮中十往來。

澹月雲に傾きて曉角哀む。小風水を吹いて碧鱗開く。此生定めて江湖に向つて老いん。默して數ふれば淮中十往來。

中秋月

暮雲收盡溢清寒。銀漢無聲轉玉盤。
此生此夜不長好。明月明年何處看。

暮雲收盡溢清寒。銀漢無聲轉玉盤。此生此夜不長好。明月明年何れの處にか看ん。

書李世南所畫秋景

李世南畫く所の秋景に書す

野水參差落漲痕。疎林敲倒出霜根。
扁舟一棹歸何處。家在江南黃葉村。

野水參差として漲痕落つ。疎林敲倒霜根を出す。扁舟一棹何の處にか歸る。家は江南黃葉の村に在り。

初冬作贈劉景文

初冬の作劉景文に贈る

荷盡已無擎雨蓋。菊殘猶有傲霜枝。
一年好景君須記。正是橙黃橘綠時。

荷盡きて已に雨を擎るの蓋無し。菊殘して猶ほ霜に傲るの枝有り。一年の好景君須く記すべし。正に是れ橙黃橘綠の時。

澄邁驛通潮閣

書李世南所畫秋景 初冬作贈劉景文 澄邁驛通潮閣

二四九

六月二十日夜渡海 予以事繫御史臺獄作二詩授獄卒梁成以遺子由 二五〇
餘生欲老海南村。帝遣巫陽招我魂。
杳杳天低鵲沒處。青山一髮是中原。
山一髮是れ中原。

六月二十日夜渡海 六月二十日夜海を渡る

參橫斗轉欲三更。苦雨終風也解晴。
雲散月明誰點綴。天容海色本澄清。
空餘魯叟乘桴意。粗識軒轅奏樂聲。
九死南荒吾不恨。茲遊奇絕冠平生。

予以事繫御史臺獄。獄吏稍見侵。自度不能堪。死獄中。不得
一別子由。故作二詩。授獄卒梁成。以遺子由。錄一

予事を以て御史臺の獄に繋がる。獄吏稍侵さる。自ら度るに堪ふる能はず。獄
中に死せん。子由に一別するを得ず。故に二詩を作り、獄卒梁成に授け、以
て子由に遺る

聖主如天萬物春。小臣愚暗自亡身。
百年未滿先償債。十口無歸更累人。
是處青山可埋骨。他年夜雨獨傷神。
與君今世爲兄弟。又結來生未了因。

足柳公權聯句 柳公權の聯句を足す

人皆苦炎熱。我愛夏日長。
薰風自南來。殿閣生微涼。

足柳公權聯句

一爲居所移、苦樂永相忘。
願言均此施、清陰分四方。

一たび居の爲に移されて、苦樂永く相忘る。
願くは言に此施を均くして、清陰四方に分た
んことを。

書晁補之所藏與可畫竹

晁補之の藏する所の與可の畫竹に書す

與可畫竹時、見竹不見人。
豈獨不見人。嗒然遺其身。
其身與竹化、無窮出清新。
莊周世無有、誰知此凝神。

與可竹を畫く時、竹を見て人を見ず。
豈獨り人を見ざるのみならん。嗒然として其
の身を遺る。
其の身竹と化し、無窮清新を出す。
莊周は世に有る無し。誰か知らん此凝神。

探春 春を探る

戴

益

盡日尋春不見春。杖藜踏破幾重雲。
歸來試把梅梢看、春在枝頭已十分。

盡日春を尋ねて春を見ず。杖藜踏み破る幾重
の雲。歸來試に梅梢を把つて看れば、春は
枝頭に在りて已に十分。

雪梅

方

岳(秋崖)

有梅無雪不精神。有雪無詩俗了人。
薄暮詩成天又雪、與梅併作十分春。

梅有り雪無ければ精神ならず。雪有り詩無け
れば人を俗了す。薄暮詩成つて天又雪ふる。
梅と併せ作す十分の春。

過零丁洋

零丁洋を過ぐ

文

天

祥(文山)

辛苦遭逢起一經。干戈落落四周星。
山河破碎風漂絮、身世飄搖雨打萍。

辛苦遭逢一經より起る。干戈落落たり四周星。
山河破碎風絮を漂はし、身世飄搖雨萍を打つ。

雪梅 過零丁洋

皇恐灘邊說皇恐、零丁洋裏嘆零丁。
人生自古誰無死、留取丹心照汗青。

皇恐灘邊皇恐を説き、零丁洋裏に零丁を嘆く。人生自古より誰か死無からん。丹心を留取して汗青を照さん。

正氣歌

天地有正氣、雜然賦流形。
下則爲河嶽、上則爲日星。
於人曰浩然、沛乎塞蒼冥。
皇路當清夷、含和吐明廷。
時窮節乃見、一一垂丹青。
在齊太史簡、在晉董狐筆。

天地正氣有り、雜然として流形を賦す。下は則ち河嶽と爲り、上は則ち日星と爲る。人に於ては浩然と曰ふ。沛乎として蒼冥に塞る。皇路清夷なるに當りては、和を含んで明廷に吐く。時窮して節乃ち見れ、一一丹青に垂る。齊に在つては太史の簡。晉に在つては董狐の筆。

在秦張良椎、在漢蘇武節。
爲嚴將軍頭、爲嵇侍中血。
爲張睢陽齒、爲顏常山舌。
或爲遼東帽、清操厲冰雪。
或爲出師表、鬼神泣壯烈。
或爲渡江楫、慷慨吞胡羯。
或爲擊賊笏、逆豎頭破裂。
是氣所磅礴、凜冽萬古存。
當其貫日月、生死安足論。
地維賴以立、天柱賴以尊。

秦に在つては張良の椎。漢に在つては蘇武の節。嚴將軍の頭と爲り、嵇侍中の血と爲り、張睢陽の齒と爲り、顏常山の舌と爲る。或は遼東の帽と爲り、清操冰雪より厲し。或は出師の表と爲り、鬼神壯烈に泣く。或は江を渡るの楫と爲り、慷慨胡羯を呑む。或は賊を撃つ笏と爲り、逆豎頭破裂す。是氣の磅礴する所、凜冽として萬古に存す。其の日月を貫くに當りては、生死安ぞ論ずるに足らん。地維賴つて以て立ち、天柱賴つて以て尊し。

三綱實係命、道義爲之根。
 嗟予遘陽九、隸也實不力。
 楚囚纓其冠、傳車送窮北。
 鼎鑊甘如飴、求之不可得。
 陰房闕鬼火、春院闕天黑。
 牛驥同一皂、雞栖鳳凰食。
 一朝蒙霧露、分作溝中瘠。
 如此再暑寒、百沴自辟易。
 嗟哉沮洳場、爲我安樂國。
 豈有他繆巧、陰陽不能賊。

三綱實に命を係け、道義之が根と爲る。
 嗟予陽九に遘ひ、隸や實に力めず。
 楚囚其の冠に纓し、傳車窮北に送らる。
 鼎鑊甘きこと飴の如し。之を求むれども得べからず。

陰房鬼火闕たり。春院天黒に闕づ。

牛驥同一皂を同くし、雞栖鳳凰食す。

一朝霧露を蒙らば、溝中の瘠と作るを分とす。

此の如きこと再暑寒。百沴自ら辟易す。

嗟い哉沮洳の場、我が安樂の國と爲る。

豈他の繆巧有らんや。陰陽も賊する能はず。

願此耿耿在、仰視浮雲白。
 悠悠我心悲、蒼天曷有極。
 哲人日已遠、典刑在夙昔。
 風簷展書讀、古道照顏色。

過平原作

平原を過ぐるの作

平原太守顏真卿、長安天子不知名。
 一朝漁陽動鞞鼓、大江以北無堅城。
 公家兄弟奮戈起、一十七郡連夏盟。
 賊聞失色分兵還、不敢長驅入咸京。

過平原作

平原の太守顏真卿、長安の天子名を知らず。
 一朝漁陽鞞鼓を動かし、大江以北堅城無し。
 公の家兄弟を奮ひて起ち、一十七郡夏盟を連ぬ。賊聞きて色を失ひ兵を分ちて還る。敢て長驅して咸京に入らず。

此を願れば耿耿として在り。仰いで浮雲の白きを視る。

悠悠たる我が心の悲、蒼天曷ぞ極有らんや。

哲人日に已に遠く、典刑夙昔に在り。

風簷書を展べて讀めば、古道顏色を照す。

明皇父子將西狩。由是靈武起義兵。
唐家再造李郭力。若論牽制公威靈。
哀哉常山慘鉤舌。心歸朝廷氣不懾。
崎嶇坎坷不得志。出入四朝老忠節。
當年幸脫安祿山。白首竟陷李希烈。
希烈安能遽殺公。宰相盧杞欺日月。
亂臣賊子歸何處。茫茫煙草中原土。
公死於今六百年。忠精赫赫雷當天。

武夷山中

謝枋得(疊山)

明皇父子將西狩。由是靈武起義兵。是に由りて靈武
義兵を起す。唐家の再造は李郭の力。若し牽
制を論ずれば公の威靈。哀い哉常山慘として
舌を鉤せられ、心朝廷に歸して氣懾れず。崎
嶇坎坷志を得ず。四朝に出入して忠節に老
す。當年幸に脱す安祿山。白首竟に陥る李
希烈。希烈安ぞ能く遽に公を殺さん。宰相
盧杞日月を欺く。
亂臣賊子何れの處にか歸す。茫茫たる煙草中
原の土。公死して今に於て六百年。忠精赫赫
雷天に當る。

十年無夢得還家。獨立青峯野水涯。
天地寂寥山雨歇。幾生修得到梅花。

十年夢の家に還るを得る無し。獨立す青峯野
水の涯。天地寂寥として山雨歇む。幾生か修
し得て梅花に到らん。

初到建寧賦詩 竝序 初て建寧に到り詩を賦す 竝に序

魏參政執拘投北。行有期。死有日。詩別妻子良友良朋。魏參政執拘して

北に投ず。行く期有り、死する日有り。詩もて妻子良友良朋に別る。

雪中松柏愈青青。扶植綱常在此行。
天下久無龔勝潔。人間何獨伯夷清。
義高便覺生堪捨。禮重方知死甚輕。
南八男兒終不屈。皇天上帝眼分明。

雪中の松柏愈青青たり。綱常を扶植するは
此行に在り。天下久しく龔勝の潔無し。人
間何ぞ獨り伯夷のみ清からんや。義高くして
便ち覺る生の捨つるに堪へたるを。禮重くし
て方に知る死の甚だ輕きを。南八男兒終に屈
せず。皇天上帝眼分明。

臨平道中 過臨平蓮蕩 夏夜逐涼

二六〇

臨平道中

釋道潛

風蒲獵獵弄輕柔。欲立蜻蜓不自由。
五月臨平山下路。藕花無數滿汀洲。

風蒲獵獵として輕柔を弄す。立たんと欲して蜻蜓自由ならず。五月臨平山下の路、藕花無數汀洲に滿つ。

過臨平蓮蕩

臨平の蓮蕩を過ぐ

楊萬里(誠齋)

人家星散水中央。十里芹羹菰飯香。
想得薰風端午後。荷花世界柳絲鄉。

人家星散す水の中央。十里の芹羹菰飯香し。想得薰風端午の後、荷花の世界柳絲の郷。

夏夜逐涼

夏夜涼を逐ふ

夜熱依然午熱同。開門小立月明中。
竹深樹密蟲鳴處。時有微涼不是風。

夜熱依然として午熱に同じ。門を開いて小立す月明の中。竹深く樹密に蟲鳴く處。時に微涼有り是れ風ならず。

庚子正月五日曉過大泉渡

庚子正月五日 曉に大泉渡を過ぐ

霧外江山看不真。只憑雞犬認前邨。
渡船滿板霜如雪。印我青鞋第一痕。

霧外の江山見て真ならず。只雞犬に憑つて前邨を認む。渡船滿板霜雪の如し。印す我が青鞋の第一痕。

田家

范成大(石湖)

晝出耕田夜績麻。村莊兒女各當家。
童孫未解供耕織。也傍桑陰學種瓜。

晝は出でて田を耕し夜は麻を績ぐ。村莊の兒女各家に當る。童孫未だ解せず耕織に供するを。也桑陰に傍ひて瓜を種うるを學ぶ。

庚子正月五日曉過大泉渡 田家

二六一

插秧

種密移疎綠毯平。行閒清淺穀紋生。誰知細細青青草、中有豐年擊壤聲。

種うる密に移す疎に緑毯平かなり。行閒清淺穀紋生ず。誰か知らんや細細青青の草、中に豊年擊壤の聲有らんとは。

過洞庭 洞庭を過ぐ

呂 洞 賓

朝遊北海暮蒼梧。袖裏青蛇膽氣麤。三入岳陽人不識。朗吟飛過洞庭湖。

朝に北海に遊んで暮には蒼梧。袖裏の青蛇膽氣麤なり。三たび岳陽に入つて人識らず。朗吟飛び過ぐ洞庭湖。

自詠

獨上高樓望八都。墨雲散盡月輪孤。茫茫宇宙人無數。幾箇男兒是丈夫。

獨り高樓に上つて八都を望めば、墨雲散じ盡きて月輪孤なり。茫茫たる宇宙人無數。幾箇の男兒か是れ丈夫。

山閒秋夜

眞 山 民

夜色秋光共一闌。飽收風露入脾肝。虛檐立盡梧桐影。絡緯數聲山月寒。

夜色秋光共に一闌。飽くまで風露を收めて脾肝に入る。虚檐立ち盡す梧桐の影。絡緯數聲山月寒し。

曉行山閒 曉に山閒を行く

出門誰是伴。只約瘦藤行。一二里山逕。兩三聲曉鶯。

門を出づるに誰か是れ伴。只瘦藤に約して行く。一二里の山逕。兩三聲の曉鶯。

山閒秋夜 曉行山閒

亂峯相出沒。初日乍陰晴。
僧舍在何許。隔林鐘磬清。

亂峯相出沒し、初日乍ち陰晴。
僧舍何れの許にか在る。林を隔てて鐘磬清し。

山中月

我愛山中月、炯然掛疎林。
爲憐幽獨人。流光散衣襟。
我心本如月、月亦如我心。
心月兩相照、清夜長相尋。

我は愛す山中の月、炯然として疎林に掛るを。
幽獨の人を憐むが爲に、流光衣襟に散す。
我が心本月の如く、月も亦我が心の如し。
心月兩ながら相照し、清夜長へに相尋ぬ。

絶句

黄 天 谷

半篙春水一蓑煙。抱月懷中枕斗眠。
說與時人休問我。英雄回首卽神仙。

半篙の春水一蓑の煙。月を懷中に抱きて斗を
枕にして眠る。時人に說與す我に問ふことを
休めよ。英雄首を回らせば卽ち神仙。

蚊

黄 中 堅

斗室何來豹脚蚊。殷如雷鼓聚如雲。
無多一點英雄血。閑到衰年忍付君。

斗室何來豹脚の蚊。殷として雷鼓の如く聚る
こと雲の如し。多無き一點英雄の血、閑に衰
年に到りて君に付するに忍びんや。

山園小梅

林

逋(和靖)

衆芳搖落獨暄妍。占盡風情向小園。
疎影橫斜水清淺。暗香浮動月黃昏。

衆芳搖落して獨り暄妍。風情を占め盡して小
園に向ふ。疎影橫斜水清淺。暗香浮動月黃
昏。

蚊 山園小梅

霜禽欲下先偷眼、粉蝶如知合斷魂。
幸有微吟可相狎、不須檀板共金尊。

霜禽下らんと欲して先づ眼を偷み、粉蝶如し
知らば合に魂を断つべし。幸に微吟の相狎
る可き有り。須ひず檀板と金尊と。

苦熱行

王

轂(次元)

祝融南來鞭火龍、火旗焰焰燒天紅。
日輪當午凝不去、萬國如在紅爐中。
五嶽翠乾雲彩滅、陽侯海底愁波竭。
何當一夕金風發、爲我掃除天下熱。

祝融南來火龍に鞭ち、火旗焰焰として天を
焼いて紅なり。日輪午に當りて凝りて去らず。
萬國紅爐の中に在るが如し。
五嶽翠乾きて雲彩滅し、陽侯海底に波の竭く
るを愁ふ。何か當に一夕金風發し、我が爲に
天下の熱を掃除すべき。

釣臺

戴

復

古(石屏)

萬事無心一釣竿、三公不換此江山。
平生誤識劉文叔、惹起虛名滿世間。

萬事無心なり一釣竿。三公にも換へず此江山。
平生誤つて識る劉文叔。虚名を惹起して世間
に満たしむ。

虞美人艸

曾

鞏(南豐)

鴻門玉斗紛如雪、十萬降兵夜流血。
咸陽宮殿三月紅、霸業已隨煙燼滅。
剛強必死仁義王、陰陵失道非天亡。
英雄本學萬人敵、何用屑屑悲紅粧。
三軍散盡旌旗倒、玉帳佳人座中老。
香魂夜逐劍光飛、青血化爲原上艸。

鴻門の玉斗紛として雪の如し。十萬の降兵夜
血を流す。咸陽宮殿三月紅なり。霸業は已
に煙燼に随つて滅す。剛強なるは必ず死し仁
義なるは王たり。陰陵に道を失せしは天の亡
すに非ず。英雄本學萬人の敵。何ぞ用ひん
屑屑として紅粧を悲むを。三軍散じ盡きて旌
旗倒れ、玉帳の佳人座中に老す。香魂夜劍光
を逐うて飛び、青血化して原上の艸と爲る。
芳心寂寞として寒枝に寄せ、舊曲聞き來りて

芳心寂寞寄寒枝、舊曲聞來似斂眉。
哀怨徘徊愁不語。恰如初聽楚歌時。
滔滔逝水流今古。漢楚興亡兩丘土。
當年遺事久成空。慷慨尊前爲誰舞。

日本刀歌

昆夷道遠不復通。世傳切玉誰能窮。
寶刀近出日本國。越賈得之滄海東。
魚皮裝貼香木鞘。黃白閒雜鑰與銅。
百金傳入好事手。佩服可以禳妖凶。

眉を斂むるに似たり。哀怨徘徊愁ひて語らず。
恰も初めて楚歌を聞きし時の如し。滔滔たる
逝水今古に流る。漢楚の興亡兩ながら丘土。
當年の遺事久しく空と成る。慷慨尊前誰が爲
にか舞はん。

歐陽 修(六一)

昆夷道遠くして復通ぜず。世に傳ふる切玉誰
か能く窮めん。寶刀近く出づ日本國。越賈之
を滄海の東に得たり。
魚皮裝貼す香木の鞘。黃白閒雜す鑰と銅と。
百金傳へて入る好事の手。佩服以て妖凶を禳
ふ可し。

傳聞其國居大島。土壤沃饒風俗好。
其先徐福詐秦民。採藥淹留卼童老。
百工五種與之居。至今器玩皆精巧。
前朝貢獻屢往來。士人往往工詞藻。
徐福行時書未焚。逸書百篇今尙存。
令嚴不許傳中國。舉世無人識古文。
先王大典藏夷貊。蒼波浩蕩無通津。
令人感激坐流涕。鏽澁短刀何足云。

傳へ聞く其の國大島に居り、土壤沃饒風俗好
し。其の先徐福秦民を詐り、藥を採つて淹留
卼童老ゆ。百工五種之と居り、今に至るまで
器玩皆精巧。前朝貢獻屢往來し、士人往往
詞藻を工にす。徐福行く時書未だ焚けず。逸
書百篇今尙ほ存す。令嚴にして中國に傳ふる
を許さず。世を舉りて人の古文を識る無し。
先王の大典夷貊に藏し、蒼波浩蕩津を通する
無し。人をして感激して坐に涕を流さしむ。
鏽澁の短刀は何ぞ云ふに足らん。

春日雜興

王 禹 偁(元之)

偶成 觀書有感

兩株桃杏映籬斜。妝點商州副使家。
何事春風容不得。和鶯吹折數枝花。

二七〇
兩株の桃杏籬に映じて斜なり。妝點す商州副使の家。何事ぞ春風容れ得ず。鶯と吹き折る數枝の花。

偶成

朱

熹(晦庵)

少年易老學難成。一寸光陰不可輕。
未覺池塘春草夢。階前梧葉已秋聲。

少年老い易く學成り難し。一寸の光陰輕んず可からず。未だ覺めず池塘春草の夢。階前の梧葉已に秋聲。

觀書有感

書を觀て感有り

昨夜江邊春水生。蒙衝巨艦一毛輕。
向來枉費推移力。此日中流自在行。

昨夜江邊春水生す。蒙衝巨艦一毛輕し。向來枉げて費す推移の力。此日中流自在に行く。

水口行舟

水口舟を行る

昨夜扁舟雨一簑。滿江風浪夜如何。
曉來試揭孤篷看。依舊青山綠樹多。

昨夜扁舟雨一簑。滿江の風浪夜如何。曉來試に孤篷を掲げて看れば、舊に依つて青山綠樹多し。

秋夕

一雨涼生杜若洲。月波微漾綠溪流。
茅簷歸去無塵土。淡薄閑花繞舍秋。

一雨涼は生ず杜若洲。月波微に漾く綠溪の流。茅簷歸去塵土無し。淡薄の閑花舍を繞つて秋なり。

醉下祝融峯

醉ひて祝融峯を下る

水口行舟 秋夕 醉下祝融峯

勸學文 寒夜

我來萬里駕長風。絕壑層雲許盪胸。
濁酒三杯豪氣發、朗吟飛下祝融峯。

勸學文

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年
不學而有來年。日月逝矣歲不我延。
嗚呼老矣是誰之愆。

寒夜

寒夜客來茶當酒。竹爐湯沸火初紅。
尋常一樣窗前月、纔有梅花便不同。

我來つて萬里長風に駕す。絶壑の層雲許胸を盪かす。濁酒三杯豪氣發し、朗吟飛び下る祝融峯。

謂ふこと勿かれ今日學ばずとも而も來日有り。謂ふこと勿かれ今年學ばずとも而も來年有りと。日月逝きぬ歳我と延びず。嗚呼老いたり是れ誰の愆ぞや。

杜

乘(小山)

寒夜客來りて茶酒に當つ。竹爐湯沸きて火初めて紅なり。尋常一樣窗前の月、纔に梅花有れば便ち同じからず。

題青泥市寺壁

青泥市の寺壁に題す

岳

飛(武穆)

雄氣堂堂貫斗牛。誓將眞節報君讎。
斬除頑惡還車駕。不問登壇萬戶侯。

雄氣堂堂として斗牛を貫く。誓つて眞節を將つて君讎を報ぜん。頑惡を斬除して車駕を還さん。問はず登壇の萬戶侯。

岳王墓

馬

存

落盡青松百草深。鷺鷥斜日叫寒林。
可憐一片西湖土、埋卻英雄未死心。

青松落盡きて百草深し。鷺鷥斜日寒林に叫ぶ。可憐む可し一片西湖の土、埋卻す英雄未だ死せざるの心。

鄂洛南樓書事

鄂洛南樓事を書す

黃

庭

堅(山谷)

題青泥市寺壁 岳王墓 鄂洛南樓書事

雨中登岳陽樓望君山 秋懷

四顧山光接水光。凭闌十里芰荷香。
清風明月無人管、併作南樓一夜涼。

四顧山光水光に接す。闌に凭れば十里芰荷香し。清風明月人の管する無く、併せて作す南樓一夜の涼。

二七四

雨中登岳陽樓望君山

雨中岳陽樓に登りて君山を望む

投荒萬死髣毛斑。生入瞿塘灘瀨關。
未到江南先一笑。岳陽樓上對君山。

荒に投じて萬死髣毛斑たり。生きて入る瞿塘の灘瀨關。未到江南に到らざるも先づ一笑す。岳陽樓上君山に對す。

秋懷

陸

游(放翁)

園丁傍架摘黃瓜。村女沿籬采碧花。
城市尙餘三伏熱。秋光先到野人家。

園丁架に傍ひて黃瓜を摘み、村女籬に沿ひて碧花を采る。城市尙ほ餘す三伏の熱。秋光先づ到る野人の家。

冬夜聽雨戲作

冬夜雨を聽きて戲に作る

遠簷點滴如琴筑。支枕幽齋聽始奇。
憶在錦城歌吹海。七年夜雨不曾知。

簷を遠る點滴琴筑の如し。枕を支へて幽齋聽いて始めて奇なり。憶ふ錦城の歌吹海に在つて、七年の夜雨曾て知らず。

示兒

兒に示す

死去元知萬事空。但悲不見九州同。
王師北定中原日、家祭無忘告乃翁。

死去元知る萬事の空しきを。但悲む九州の同きを見ざるを。王師北中原を定むるの日、家祭忘るる無かれ乃翁に告ぐるを。

遊山西村

山西の村に遊ぶ

冬夜聽雨戲作 示兒 遊山西村

二七五

莫笑農家臘酒渾。豐年留客足雞豚。
山重水複疑無路。柳暗花明又一村。
簫鼓追隨春社近。衣冠簡朴古風存。
從今若許閒乘月。拄杖無時夜叩門。

笑ふこと莫かれ農家臘酒の渾るを。豊年客を留めて雞豚足る。山重水複路無きかと疑ふ。柳暗花明又一村。簫鼓追隨春社近く、衣冠簡朴古風存す。今より若し閒に月に乗ずるを許さば、杖を拄へて時と無く夜門を叩かん。

書憤

早歲那知世事艱。中原北望氣如山。
樓船夜雪瓜洲渡。鐵馬秋風大散關。
塞上長城空自許。鏡中衰鬢已先斑。
出師一表眞名世。千載誰堪伯仲閒。

早歲那ぞ知らんや世事の艱。中原北に望めば氣山の如し。樓船夜雪瓜洲の渡。鐵馬秋風大散關。塞上の長城空しく自ら許す。鏡中の衰鬢已に先づ斑たり。出師一表眞に名世。千載誰か堪へん伯仲の閒。

吳山

金 主 亮

萬里車書合混同。江南豈有別提封。
移兵百萬西湖上。立馬吳山第一峯。

萬里車書合に混同すべし。江南豈別提封有らんや。兵を移す百萬西湖の上。馬を立つ吳山の第一峯。

晚宿山寺

晚に山寺に宿す

金 趙

風

松閒明月佛前燈。庵在孤雲最上層。
犬吠一山秋意靜。敲門時有夜歸僧。

松閒の明月佛前の燈。庵は孤雲の最上層に在り。犬吠えて一山秋意靜かに、門を敲いて時に夜歸の僧有り。

過梅嶺岡留題

梅嶺岡を過ぎて留題す

元 伯

顔

馬首經從庾嶺回。王師到處悉平夷。

馬首庾嶺を經從して回る。王師到る處悉く

有客問余近況者詩以答之 博浪沙

二七八

擔頭不帶江南物。只插梅花一兩枝。

平夷す。擔頭帶びず江南の物。只挿む梅花の一兩枝。

有客問余近況者詩以答之

客余の近況を問ふ者有り。詩以て

之に答ふ

王

樞

豪氣於今尙未除。難將壯志付樵漁。
短衣射虎南山下。帶月歸來夜讀書。

豪氣今に於て尙ほ未だ除かず。壯志を將て樵漁に付し難し。短衣虎を射る南山の下。月を帯びて歸來夜書を讀む。

博浪沙

陳

孚

一擊車中膽氣豪。祖龍社稷已驚搖。
如何十二金人外。猶有人閒鐵未銷。

一擊車中膽氣豪なり。祖龍の社稷已に驚搖す。如何十二金人の外、猶ほ人閒鐵未だ銷せざる有り。

岳鄂王墓

趙

孟

頰(松雪)

鄂王墓上草離離。秋日荒涼石獸危。
南渡君臣輕社稷。中原父老望旌旗。
英雄已死嗟何及。天下中分遂不支。
莫向西湖歌此曲。水光山色不勝悲。

鄂王墓上草離離たり。秋日荒涼石獸危し。南渡の君臣社稷を輕んじ、中原の父老旌旗を望む。英雄已に死す嗟何ぞ及ばん。天下中分遂に支へず。西湖に向つて此曲を歌ふこと莫かれ。水光山色悲むに勝へず。

寄子

子に寄す

明 徐

氏(耿庭柏母)

家内平安報爾知。田園歲入有餘資。
絲毫不用南中物。好作清官答聖時。

家内平安爾に報じて知らしむ。田園の歲入餘資有り。絲毫も用ひず南中の物。好し清官と作りて聖時に答へよ。

岳鄂王墓 寄子

二七九

問梅閣 尋胡隱君 逢吳秀才復送歸江上

二八〇

問梅閣

高

啓(青邱)

問春何處來。春來在何許。
月墮花不言。幽禽自相語。

春に問ふ何れの處より來る。春來りて何れの許にか在ると。月墮ちて花言はず。幽禽自ら相語る。

尋胡隱君

胡隱君を尋ぬ

渡水復渡水。看花還看花。
春風江上路。不覺到君家。

水を渡り復水を渡り、花を看還花を看る。
春風江上の路、覺えず君が家に到る。

逢吳秀才復送歸江上

吳秀才に逢ひ復江上に歸るを送る

江上停舟問客蹤。亂前相別亂餘逢。
暫時握手還分手。暮雨南陵水寺鐘。

江上舟を停めて客蹤を問ふ。亂前相別れて亂餘に逢ふ。暫時手を握つて還手を分つ。暮雨南陵水寺の鐘。

夜投西寺

夜西寺に投ず

江月上秋衣。來敲遠寺扉。
栖禽驚客至。睡僕訝僧歸。
鐘度行廊盡。燈留俗院微。
非無招旅館。禪寂願相依。

江月秋衣に上る。來り敲く遠寺の扉。
栖禽客の至るに驚き、睡僕僧の歸りしかと訝る。鐘は行廊を度つて盡き、燈は俗院に留つて微なり。招旅の館無きに非ざるも、禪寂願はくは相依らん。

梅花

夜投西寺 梅花

二八一

猛虎行

瓊姿只合在瑤臺。誰向江南處處栽。
雪滿山中高士臥。月明林下美人來。
寒依疎影蕭蕭竹。春掩殘香漠漠苔。
自去何郎無好詠。東風愁寂幾回開。

猛虎行

陰風吹林鳥鵲悲。猛虎欲出人先知。
目光瞳瞳當路坐。將軍一見弧矢墮。
幾家插棘高作門。未到日沒收豬豚。
猛虎雖猛猶可喜。橫行唯在深山裏。

瓊姿只合在瑤臺に在るべし。誰か江南に向つて處處に栽う。
雪滿ちて山中高士臥し、月明かにして林下美人來る。寒は依る疎影蕭蕭の竹。春は掩ふ殘香漠漠の苔。何郎去りしより好詠無し。東風愁寂幾回か開く。

二八二

陰風林を吹いて鳥鵲悲む。猛虎出でんと欲して人先づ知る。目光瞳瞳として路に當りて坐す。將軍一たび見て弧矢墮つ。幾家か棘を挿みて高く門と作す。未だ日の没するに到らずして豬豚を收む。猛虎は猛なりと雖も猶ほ喜ぶ可し。橫行唯深山の裏に在り。

懊懷歌

白鷄養雛時。夜夜啼達曙。
如何羽翼成。各自東西去。

劉

基(青田)

白鷄雛を養ふ時、夜夜啼いて曙に達す。如何ぞ羽翼成りて、各自ら東西に去る。

感慨

結髮事遠遊。逍遙觀四方。
天地一何闊。山川杳茫茫。
衆鳥各自飛。喬木空蒼涼。
登高見萬里。懷古使心傷。

懊懷歌 感慨

結髮遠遊を事とし、逍遙して四方を觀る。天地一に何ぞ闊なる。山川杳にして茫茫たり。衆鳥各自ら飛び、喬木空しく蒼涼たり。高に登つて萬里を見、古を懷うて心をして傷ましむ。

二八三

閑居感懷 讀秦紀

佇立望浮雲。安得凌風翔。

二八四
佇立して浮雲を望む。安んぞ風を凌いで翔を得ん。

閑居感懷

方孝孺(正學)

我非今世人。空懷今世憂。
所憂諒無他。慨想禹九州。
商君以爲秦。周公以爲周。
哀哉萬年後。誰爲斯民謀。

我は今世の人に非ず。空しく懷く今世の憂。憂ふる所は諒に他無し。慨想す禹の九州。商君は以て秦の爲にし、周公は以て周の爲にす。哀い哉萬年の後、誰か斯民の爲に謀る。

讀秦紀 秦紀を讀む

陳恭尹

謗聲易引怨難除。秦法雖嚴亦甚疎。
夜半橋邊呼孺子。人間猶有未燒書。

謗聲弭め易く怨は除き難し。秦法嚴なりと雖も亦甚だ疎なり。夜半橋邊孺子を呼ぶ。人間猶ほ未だ燒かざるの書有り。

京師得家書

京師にて家書を得たり

袁

凱(景文)

江水三千里。家書十五行。
行行無別語。只道早歸鄉。

江水三千里。家書十五行。行行別語無し。只道ふ早く郷に歸れと。

暑夜

釋宗泐(季潭)

此夜炎蒸不可當。開門高樹月蒼蒼。
天河只在南樓上。不借人間一滴涼。

此夜炎蒸當る可からず。門を開けば高樹月蒼蒼。天河は只南樓の上に在り。借さず人間一滴の涼。

京師得家書 暑夜

二八五

臨刑詩

刑に臨む詩

楊 繼 盛

浩氣還太虛、丹心照千古。
平生未報恩、留作忠魂補。

浩氣太虚に還り、丹心千古を照らす。
平生未だ報いざるの恩、留めて忠魂と作つて補はん。

征夫詞

劉 績

征夫語征婦、死生不可知。
欲慰泉下魂、但視襟中兒。

征夫征婦に語る。死生知る可からず。
泉下の魂を慰めんと欲せば、但襟中の兒を視よ。

征婦詞

征婦語征夫、有身當殉國。
君爲塞下士、妾作山頭石。

征婦征夫に語る。身有らば當に國に殉ずべし。
君が塞下の士と爲らば、妾は山頭の石と作らん。

開元寺

李 夢 陽(獻吉)

瀑布半天上、飛響落人間。
莫言此潭小、搖動匡廬山。

瀑布半天の上。飛響人間に落つ。
言ふ莫かれ此潭小なりと。搖動す匡廬山。

山中示諸生

山中諸生に示す

王 守 仁(陽明)

溪邊坐流水、水流心共閑。
不知山月上、松影落衣斑。

溪邊流水に坐し、水流れて心と共に閑なり。
知らず山月の上るを。松影衣に落ちて斑たり。

開元寺 山中示諸生

山中懶睡四首 題灌山小影二首 夜宿天池月下聞雷

山中懶睡四首 錄一

掃石焚香任意眠。醒來時有客談玄。
松風不用葡萄扇。坐對青崖百丈泉。

石を掃ひ香を焚きて意に任せて眠る。醒め來りて時に客の玄を談する有り。松風用ひず葡萄の扇。坐して對す青崖百丈の泉。

題灌山小影二首 錄一 灌山の小影に題す

一自移家入紫煙。深林住久遂忘年。
山中莫道無供給。明月清風不用錢。

一たび家を移して紫煙に入りてより、深林住する久しくして遂に年を忘る。山中道ふ莫かれ供給無しと。明月清風錢を用ひず。

夜宿天池月下聞雷 夜天池に宿し月下に雷を聞く

昨夜月明峯頂宿。隱隱雷聲在山麓。
曉來卻問山下人。風雨三更捲茆屋。

昨夜月明峯頂に宿す。隱隱たる雷聲山麓に在り。曉來卻つて問ふ山下の人、風雨三更茆屋を捲く。

泛海 海に泛ぶ

險夷原不滯胸中。何異浮雲過太空。
夜靜海濤三萬里。月明飛錫下天風。

險夷原胸中に滯らず。何ぞ異ならん浮雲の太空を過ぐるに。夜は靜なり海濤三萬里。月明かに飛錫天風を下る。

答人問道 人の道を問ふに答ふ

饑來喫飯倦來眠。只此修行玄更玄。
說與世人渾不信。卻從身外覓神仙。

饑來れば飯を喫し倦み來れば眠る。只此修行玄更に玄。世人に說與すれども渾て信ぜず。卻つて身外より神仙を覓む。

泛海 答人問道

嗽吟

知者不惑仁不憂。君何戚戚雙眉愁。
信步行來皆坦道。憑天判下非人謀。
用之則行舍即休。此身浩蕩浮虛舟。
丈夫落落掀天地。豈願束縛如窮囚。
千金之珠彈鳥雀。掘土何煩用錫鑊。
君不見東家老翁防虎患。虎夜入室
銜其頭。西家兒童不識虎。執竿驅虎
如驅牛。

知者は惑はず仁は憂へず。君何ぞ戚戚雙眉愁
ふ。歩に信せて行來すれば皆坦道。天に憑り
て判下す人謀に非ず。之を用ふれば則ち行ひ
舍つれば即ち休す。此身浩蕩虚舟を浮ぶ。丈
夫落落天地を掀す。豈願りて束縛窮囚の如く
ならん。千金の珠鳥雀を弾ぜんや。土を掘る
何ぞ煩さん錫鑊を用ふるを。
君見ずや東家の老翁虎患を防ぐ。虎夜室に入
つて其の頭を銜む。西家の兒童虎を識らず。
竿を執り虎を驅ること牛を驅るが如し。
癡人噎に懲りて遂に食を廢す。愚者は溺を畏

癡人懲噎遂廢食。愚者畏溺先自投。
人生達命自洒落。憂讒避毀徒啾啾。

れて先づ自ら投ず。
人生命に達すれば自ら洒落。讒を憂ひ毀を
避けて徒に啾啾せん。

凱歌

沈明臣(嘉則)

銜枚夜渡五千兵。密領軍符號令明。
狹巷短兵相接處。殺人如草不聞聲。

枚を銜んで夜渡る五千の兵。密に軍符を領し
て號令明かなり。狹巷短兵相接する處。人を
殺す草の如く聲を聞かず。

松關

唐順之(荆川)

月出照松關。松陰正滿地。
恐有山僧歸。終夜不須閉。

月出でて松關を照す。松陰正に地に滿つ。
恐らくは山僧の歸る有らん。終夜閉づるを須
ひず。

凱歌 松關

從軍行

三邊烽火照軍營。十萬丁男夜練兵。
但使腰閒懸寶刀、丈夫何處不成名。

清乾隆帝

三邊の烽火軍營を照す。十萬の丁男夜兵を練る。但腰閒に寶刀を懸けしめば、丈夫何れの處か名を成さざらん。

春日雜詩

袁

枚(隨園)

千枝紅雨萬重烟。畫出詩人得意天。
山上春雲如我懶、日高猶宿翠微巔。

銷夏詩

千枝の紅雨萬重の烟。畫き出だす詩人得意の天。山上の春雲我が懶の如く、日高くして猶ほ宿す翠微の巔。

不著衣冠近半年。水雲深處抱花眠。
平生自想無官樂。第一驕人六月天。

衣冠を著けざる半年に近し。水雲深處花を抱いて眠る。平生自ら想ふ無官の樂。第一人に驕る六月の天。

赤壁

一面東風百萬軍。當年此處定三分。
漢家火德終燒賊、池上蛟龍竟得雲。
江水自流秋渺渺。漁燈猶照荻紛紛。
我來不共吹簫客。烏鵲寒聲靜夜聞。

一面東風百萬の軍。當年此處三分を定む。漢家の火德終に賊を燒き、池上の蛟龍竟に雲を得たり。江水自ら流れて秋渺渺。漁燈猶ほ照して荻紛紛。我來りて簫を吹くの客と共にせず。烏鵲寒聲靜夜に聞く。

舟中見獵犬感作

舟中獵犬を見て感じて作る

宋

琬(荔裳)

秋水蘆花一片明。難同鷹隼共功名。
檣邊飽飯垂頭睡。也似英雄髀肉生。

秋水蘆花一片明かなり。鷹隼と同じく功名を共にし難し。檣邊飯に飽きて頭を垂れて睡る。也似たり英雄髀肉の生ずるに。

二九四

王士禛(漁洋)

眞州雜詩

江干多是釣人居。柳陌菱塘一帶疎。
好是日斜風定後。半江紅樹賣鱸魚。

江干多くは是れ釣人の居。柳陌菱塘一帶疎なり。好し是れ日斜に風定まるの後、半江の紅樹鱸魚を賣る。

冶春絕句

東風花事到江城。早有人家喚賣餚。
他日相思忘不得。平山堂下五清明。

東風花事江城に到る。早く人家の賣餚を喚ぶ有り。他日相思うて忘れ得ず。平山堂下五清明。

悼亡

藥爐經卷送生涯。禪榻春風兩鬢華。
一語寄君君聽取。不教兒女衣蘆花。

藥爐經卷生涯を送る。禪榻の春風兩鬢の華。一語君に寄す君聽取せよ。兒女をして蘆花を衣せしめず。

醉後口占

錦衣玉帶雪中眠。醉後詩魂欲上天。
十二萬年無此樂。大呼前輩李青蓮。

錦衣玉帶雪中に眠る。醉後の詩魂は天に上らんと欲す。十二萬年此樂無し。大呼す前輩の李青蓮。

張問 陶(船山)

過黃州

黃州を過ぐ

悼亡 醉後口占 過黃州

赤壁

蜻蛉一葉獨歸舟。寒浸春衣夜水幽。
我似橫江西去鶴。月明如夢過黃州。

二九六

蜻蛉一葉獨歸の舟。寒は春衣を浸して夜水幽なり。我は似たり横江西去の鶴。月明夢の如く黄州を過ぐ。

赤壁

依然形勝扼荆襄。赤壁山前故壘長。
烏鵲南飛無魏地。大江東去有周郎。
千秋人物三分國。一片山河百戰場。
今日經過已陳迹。月明漁父唱滄浪。

趙

翼(甌北)

依然たる形勝荆襄を扼す。赤壁山前故壘長し。烏鵲南に飛んで魏地無く、大江東に去つて周郎有り。千秋の人物三分の國。一片の山河百戦の場。今日經過すれば已に陳迹。月明かにして漁父滄浪を唱ふ。

和漢朗吟詩集

定價金壹圓

昭和十一年五月二十日印刷
昭和十一年五月二十五日發行

校閱者

簡野道明

發行者

三樹退三

印刷者

綾部喜久二

印刷所

宮本印刷所

不許
複製

發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話神田(25) 二二二四 四四四九 八七番

簡野道明先生著

- | | | | | | | | | | |
|------------------|--------------|--------------|------------|------------|------------|--------------------|-----------------|---------------|---------------------------------|
| ◆ 孟子通解 (原版本) 五〇〇 | ◆ 論語解義 三〇〇 | ◆ 中庸解義 二〇〇 | ◆ 大學解義 一七〇 | ◆ 歷代詩鈔 一〇〇 | ◆ 校註唐詩選 九〇 | ◆ 唐詩選詳說 (上下各) 三〇〇 | ◆ 白詩新釋 三〇〇 | ◆ 和名詩類選評釋 三〇〇 | ◆ 和漢朗吟集新解 一〇〇 <small>定價</small> |
| ◆ 新言志四錄 一〇〇 | ◆ 日本外史新解 一〇〇 | ◆ 十八史略新解 一七〇 | ◆ 孟子新解 一五〇 | ◆ 論語新解 一五〇 | ◆ 用字便覽 一〇〇 | ◆ 縮刷字源 (漢和大辭典) 三〇〇 | ◆ 增修故事成語大辭典 六〇〇 | ◆ 老子解義 四〇〇 | ◆ 縮刷孟子通解 二〇〇 <small>定價</small> |

東京 明治書院 發行

終

